

2025年8月26日

amu定例～文字起こし

00:00:00

高橋英信: おい。

安部和音: おん、なんで? え、人のゲはい。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: これで今音されてるよね。はい。

竹林ユウマ: そう。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: うん。されてる。ちょっと待って。張り忘れてるやつがある。

安部和音: なんかよくわからんけど。これもかけとくか。はい。おお。

竹林ユウマ: ちょっと待ってね。うんと、どこまで話したっけ? あ、そう、ヒューマニストさんセリフ系はアムのブランドコンセプト現時点でのと、ま、マッチしてるし建築のコンセプトともあってる

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: から、ま、この法制、この方向性でまず間違いないだろうって思ってた、ま、とはいえオプテマは若干ね、ちょっとビューティのビューティよりもう少しバランスのいい安倍のポトを探してきたっていうのが左側にまずあって、まず

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: 1個目が ITC レガシーサンズっていうフォントがあってで若干ヒューマニスト3セリフってよりかはちょっとサンセリフよりま、ただこのなんか欲用はあるからウェイトのうん。

00:02:22

安部和音: うん。うん。うん。ちょうどいいかも、これ。

竹林ユウマ: ま、ただうーん、ま、リチってよりかはどっちかというと親しみやすさ。

安部和音: いや、いい気がするな。

竹林ユウマ: あの、本当うん。

安部和音: ま、いい気がするが。小文字にしたらどうなんのこれ? うん。

竹林ユウマ: ちょっと待って。リンク貼っとけばよかったな。全部こ文字。

安部和音: 5文字とか大文字とか形は好きなんだけど、そのポップすぎるってのは結構確か。

高橋英信: あ

竹林ユウマ: うん。うん。ま、悪くはないね。うん。うん。

安部和音: あ、お、いいかもしれん。面字な。ま、AMU だけしか今見てないけど。U の小文字のこれめっちゃ良くない? うん。
竹林ユウマ: ま、分かりやすい。あの、ヒューマニストサンセフの中でも、ま、死認性はいいいね。シンプルだから。うん。
安部和音: まだ個性出てるな。
竹林ユウマ: 読みやすいと思う。うん。
安部和音: 個性が出てるな。AA が大文字だとね、ちょっとエレガントよりなんかなんだろな。

00:03:57

竹林ユウマ: うん。
安部和音: こうフォントが柔らかいのになんか柔らかくねえな。
竹林ユウマ: うん。
安部和音: ポンドが3セリフ感があるのに対して A が大文字だと結構硬かったんだよね。え、
竹林ユウマ: うん。
安部和音: A 文字逆にこの大文字だけっていうのもまあでも大文字だけありだけど個性ないよね。うん。大学にしか見えないな。
高橋英信: ああ。
竹林ユウマ: はい。はい。はい。はい。はい。ないね。無性だね。
高橋英信: うん。
竹林ユウマ: これもう普通のサンセリフっぽいもんね。
安部和音: AMU うん。
竹林ユウマ: ああ、確かに。
安部和音: ア**マクユニバしていいの? うん。
竹林ユウマ: うん。東洋大学。豊大学っぽいわ。なんかまあまあまあ1選択肢としてありかなっていう感じ。まず1個目ね。で、2個目がアルバートノバっていう、ま、これ、厳密にはヒューマニストした3セリフじゃないんだけど、ま、さっきの本当に比べてこのな、
安部和音: うん。うん。
竹林ユウマ: 何て言うの? これ、何て言うんだっけ? セリフの部分かな? セリフ確かそのさ、あの漢字で言うため止め払いみたいなのが割と存在感が強くってうん

00:04:59

安部和音: うーん。これセリフって言うんだ。これのことをセリフって言うんだ。うん。うん。
竹林ユウマ: 。あの、なんて言うの? ちょっと力強さを感じる。
安部和音: うん。せ、線がいいね。

竹林ユウマ: うん。これね、まあ、ライトとかレギュラーはちょっと太すぎかなって感じだけど、ま、芯とかは割と高級感もありつつ死認性もいいし、えー、なんて言うの? ヒューマニスト、ヒューマニティもちゃんとある。金備えてると。これもバランスいいと思う。うん。

安部和音: そうね。うん。うん。うん。うん。ま、たださっきの方がカッコいい。

竹林ユウマ: うん。はい。はい。はい。

高橋英信: うん。

安部和音: あ、でもなんかその何、そのハムランってやつ。それ、それがこれ使ってるの? あ、これうめえな。

竹林ユウマ: いや、使ってない。これはこのヒューマニスト3セルフで作られてるロゴ。うん。こいうね、この

安部和音: なんかこれハム、ハムランうめえな。

高橋英信: うん。

安部和音: ま、そこ、そこ、そうやってるんだよね、多分。そうね。うん。うん。うん。ふん。ふん。ふん。ふん。ふん。ふん。

00:06:02

竹林ユウマ: H の橋の部分。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: うん。ま、ベースになるフォントは多分結構近しいんじゃない? うん。で、もう1個がパラティーのサンズっていう。俺結構これ欲しくて、ま、ていうのも、まあ、若干家独性は、ま、他の2つに比べたら落ちるんだけど、ま、何より人間身がすごい感じられるで、その歴史っていうものをなんか早起させる印象があって、ま、例えばこれ線が統一に見えて多分若干歪みというか、背の

安部和音: うん。ふん。

高橋英信: そうだよね。

安部和音: ふ。

高橋英信: ああ。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: 太さに揺れがあるのよ。

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: ちょ、画質荒いから分かりづらいけど、多分 M のここもね、若干揺らぎがあんのよ。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: そうだからそのちゃんと造形としての美しさはありつつもまあなんか人間身が多分1番強い気がしててで文字単体で見た時もそうなん

00:07:00

安部和音: うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: けどなんか他の例えば今の建築にサインで入れたりとかを想像した時になんか1番別府に馴染みそうだなっていう印象はある。

安部和音: うん。うん。うん。ちょっとクオリティ高いな、これ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: めっちゃめっちゃクオリティ本当でプロライトがめちゃくちゃいいわ。

竹林ユウマ: これいいよね。うん。うん。そうね。

安部和音: ああ、ないね。うん。これえぐいな。この本当これじゃ。うん。うん。うん。それもいけるんだよね。それも行けってことか。

竹林ユウマ: これ使ってるのあんま見たことない。なんかこれ見つけた時、あ、初めましてだて感じがあったから。

高橋英信: に

竹林ユウマ: これやばいよね。で、ま、このなん、こっちもいいのよ。こっちもいいんだけど。

ま、そう、家独性多分めっちゃ低いのよ。

安部和音: いや、逆にそのさ、あれじゃん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: いや、ま、プロ、プロななんだっけ？プロライトの方使っというてそれも使えるっての結構良くない？うん。

00:07:59

竹林ユウマ: うん。あ、まあでも全然ありだと思うよ。なんだから例えば、ま、サインとかはさ、絶対透明からでもちゃんと死認できないとダメじゃん。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: だ、ちゃんとそのホテルとかにフィジカルで何かオブジェクトとしておくものはこちを使う。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: 例えばリフレットの見出しとかはある程度の細さも許容できるから、あとはウェブとかね、ウェブのコピーの部分とか、ま、それはこっちを使うみたい

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: なうん。

安部和音: そうね。

竹林ユウマ: 使い分けもあり。

安部和音: うん。そんな意味ま、でもあれだね、その幽霊、幽霊の部分結構弱くなるんだ。それだ。

竹林ユウマ: ま、そうね。

安部和音: で、ま、でもかっこいいな。

竹林ユウマ: うん。ま、M がね、M のこの下の部分が多分若干こうやって沿ってんのなん

かそれがいい味らしてんだよね。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。あれだな。

00:08:51

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: なんかあの、ま、ホテルはプロライトですって行ってさ、あ、いつかシャンプー作ってさ、シャンプーのラベルがさ、それみたいなさ、なんかそんな感じの

竹林ユウマ: ああ、めっちゃいいじゃん。なるほどね。うん。そうだね。確かに。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: 使い方だよ、多分。だからそのアムの上に乗っかってくる何かとかのさ、そういうデザインにすげえ合うなっていうでしょ。

竹林ユウマ: ま、でも金額見てない。いくらするかわかんないわ、これ。

安部和音: そうなんだよ。これ気になりましたよ。

竹林ユウマ: ちょっと調べてみよう。

安部和音: このクオリティはそう。

竹林ユウマ: うん。じゃ、やっぱヒューマニストセリフ最近多いのよ。ウェブデザインとかロゴで使ってたの。ちょっとリサーチしたんだけど、まあまあ増えてて、あの、ワツ、ホビー、全盛期と比べてね。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: ま、多分普通のデザインのトレンドでもあるんだろうけど、このタイプはあんまり見ねえなと思って、ま、差別化も独自性も出せうっていう。

安部和音: 早そうねえ。これさ、え、ああ。

00:10:04

高橋英信: あ。

竹林ユウマ: あ、リンコクロック。

安部和音: はい。1個だ。1個だったら1万円ぐらいだよ。あのファミリー

竹林ユウマ: あ、マジで? うん。

安部和音: 12万ぐらい。

竹林ユウマ: いや、でもね、ぶっちゃけ真ん中いらんのよね。このイタリックとか多分使わない気がするよ。

安部和音: うん。ま、使ファミリーはいらないとか安くないだとしたら結構マイフツは1万円って書いてるよ。

竹林ユウマ: うん。そ、使用用途によって金額変わるとかじゃないの? これロゴだと高いみたい。ウェブで使うとかが安いとかマジで。

安部和音: うん。フオって何も何でも使えるんじゃないか? うん。

竹林ユウマ: うん。ま、そんな感じ。これパランティーのサンズのこのボードもいいな。これ編むとは合わないけどめっちゃめっちゃ可愛い。

安部和音: いいね。ああ、いいね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: あ、すげえ。これ完成度か。これめっちゃアプリじゃない？これ。

竹林ユウマ: これすごいね。

00:11:02

竹林ユウマ: うん。アプリだね。

安部和音: うーん。

竹林ユウマ: うん。ま、こんな感じっすっすね。

安部和音: あ、ただ和分和分がどううん。

竹林ユウマ: ラブンちょっと合わせてみるか。まあでも普通に3セリフじゃねえわ。ゴシック体合うと思うけどね。これえっと明るくなんか適当に文章うん。

安部和音: ま、そっすね。フィグマ最近触り倒してるけどやばいわ。こいつやばすぎる。フラグインやばすぎる。

竹林ユウマ: うん。別に新しく開業したホテルです。

安部和音: うん。ふん。

竹林ユウマ: あなたを未知の世界にお連れいたしましょう。

安部和音: ふん。

竹林ユウマ: 笑。

安部和音: いや、ちょ消しといて。持ってかれる。

竹林ユウマ: 1回じゃあ A 1とか当ててみるか。

安部和音: ああ、でもなんか俺もなんか今思ったのは A 156とかな気がしあ、はいはいはいはいはいはいはいはいはいはいはい。そうすよね。

竹林ユウマ: うん。あ、いいや。

高橋英信: ああ。

竹林ユウマ: めっちゃ良くね、これ。

00:12:20

竹林ユウマ: めっちゃ良くないか？レギュラー M。ああ、ま、でもどうなの？こっちウェイト細めじゃん、割と。

安部和音: ああまっぼいね。うん。

竹林ユウマ: うん。まあ、A 1ならレギュラーでも落とす。

安部和音: ま、これがまずめっちゃいいね。て、あのホテルいらねえわ。決していいよ。

竹林ユウマ: オ、ちょっと待って。

高橋英信: は

竹林ユウマ: サンズ JP

安部和音: うん。ふんふんふんふんふんふんふん。行けるんだな。あと小文字と大文字も用意してくれない？あ、でも大文字このさ、ホテル別が消えたら AMU クソかっこいいな。

高橋英信: こ

竹林ユウマ: 文字文字ちょっと待って。

安部和音: この大文字はい。

竹林ユウマ: そうね。はい。小文字行きます。いやあ、多分大文字の絵の造形がかっこいいから。この本当は確かに本当。

安部和音: お文字の映画 Amazon すぎるんだよな。まず Amazon って何だっけ？うん。何だっけ？なんだ？ま、ちょっとうん。

竹林ユウマ: え、なんだろう？わかんない。

00:13:52

高橋英信: ある。

竹林ユウマ: うん。1回じゃあこのフォントでさ、コピー書いてみるか。なんか適当なコピーっぽい英文をチャットとかで送って欲しいな。

安部和音: うん。適当な。

竹林ユウマ: うん。ウアアム別ホテルみたいな。

安部和音: ああ。

竹林ユウマ: 何でもいい。

安部和音: 線画面のはい。はい。え、お、いいね。

竹林ユウマ: うーん。あ、これライトか。

高橋英信: お

竹林ユウマ: しょうか。えっとうん。

安部和音: あ、今あれか。フグマに貼ればいいのか。あ。

竹林ユウマ: はい。はい。はい。ちょっと待って。これをじゃあうとアランティーノにして。おあ、いいんじゃない？結構パンチありますよ。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 独自性も。うん。ああ、でもこれ見出しちょっと大きくしすぎたらロゴが負ける可能性もあるな。

安部和音: そっすね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: てかいや、普通にあれだよ。

00:16:00

安部和音: A分が投げんだよ。これな気がする。

竹林ユウマ: なるほど。

安部和音: あ、これ画像になったのか。そうね。うんふんふんふん。

竹林ユウマ: なんか結構しっくり来る。

安部和音: でもでも負ける感じがすごいするね。やっぱあれかもな。もう

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 1個用意した方がいいのかもしないな。あ、そっか。補正法あんのか。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: あ、じゃあ細かい方でやってみるか。遅いとね、だいぶ印象がん、確かに。

安部和音: まず本文に負ける感じがあるんじゃないかな。本文に負けるんじゃない？ あったらなんかありな気がする。このそうね。

竹林ユウマ: うーん。いやあ、なしじゃね。

安部和音: コンビネーションは良くないっすね。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: うん。やっぱこのフォントはライトだね。ライトがかっこいいね。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: ま、あとはあ、ちょっと待って。うん。うん。あ、並ぶこ。はい。はい。はい。

安部和音: あ、まあでもさ、ま、結構思ったのはエム言うのと並ばないかなって。この英文が並ぶことがない気がするから。

00:17:34

高橋英信: お

安部和音: で、下の2つは成立してるじゃん、これ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: あ、これでいいんじゃない？うん。

竹林ユウマ: ちなみにこれ右のはレギュラー左。

安部和音: うん。ちょっと大きい。あの、隠してくんない？元々のやつ。お。ええ、おもしろ。お、ちょっともうちょいあの、トリム、トリミングしていくんね。

竹林ユウマ: ま、悪くないね。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: おもしろいね、この本当。ちょっと待ってね。

安部和音: おお、なるほど。ああ、なんか行け、行けちゃってんな。え、マジで？マジで？あの、右のやつもちょ、隠してくんない？うん。

竹林ユウマ: ちょっと待って。えっと、一旦 A 1にするわ。

高橋英信: あ。

竹林ユウマ: で、ちょっと諸々ろのサイズ調整をする。

安部和音: あ、さっきぐらいの長さが良かったかもな。なんかあれも4行ぐらいにするか。

竹林ユウマ: オッケー。ちょっと待って。同じ文章じゃないな。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: どう

安部和音: うん。

高橋英信: 次

安部和音: GPT に投げたらあれな。

00:19:40

安部和音: あ、まあいいんじゃない。はい。はい。

竹林ユウマ: ま、こういう感じかな。ちょっと英文が短すぎるな。これをじゃあ日本語訳え。

安部和音: Ja

竹林ユウマ: ちょっと待って。

高橋英信: はい。

竹林ユウマ: うーん。あ、じゃあこれノットサンズだから気持ち悪いんだ。

安部和音: そういうことか。

竹林ユウマ: ちょっと1回うん。近そうな本当に変えるわ。

安部和音: ああ、でもやっぱオブティマってオブティマだね。

竹林ユウマ: じゃない方がいい。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: なんだろう？ガモンドいや、ちょ違うね。

安部和音: うん。なんかそ、そっち系になっちゃうよね。うん。

竹林ユウマ: むずい。

安部和音: ま、まあまあまあまあいい。

竹林ユウマ: てか普通に3セリフでいっか。

安部和音: あ、でもさ、なんかま、やるなんかキャラ的にはね、こういう英文をね、あと並べないからいいかも。

竹林ユウマ: いる。うん。

安部和音: さっきぐらいだよ。並べんのも1番最初の文章ぐらいだよな。

竹林ユウマ: ん。オッケー。

00:21:50

安部和音: ウービングモーメンツビヨンドなんたらビヨンドステーキ。

竹林ユウマ: ま、これでいっか。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: ちょっとじゃあうーとうん。

安部和音: ま、結構いいな。なんか、え、え、A がもうちょい遊びたいなみたいな感じしたけ

ど。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: アースカラーにするわ。

安部和音: うん。うん。使いて。この色メモっという。今の色。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: あ、違う。これさっきのさっきさっきの色ってる最中だった。

竹林ユウマ: さっきの、さっきの色ってどれだ？まあまあ色はゆっくり探してるので。はい。

安部和音: うん。土感が良かった。さっきの。

竹林ユウマ: うん。ああ。

高橋英信: え

竹林ユウマ: ま、ブラッシュアップする必要があるが刺さってやるとこんな感じかな。

安部和音: だ。ちょっとウィービングモーメントができな。うん。もういらねえんじゃね？それ英分違うか。バランス悪いか？下よ好きだったけどね。そういうの。はいはいはい。

00:23:48

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。うん。ふん。ふん。ふん。うん。めちゃくちゃいい気がするな。なんかぬくめるとキャラ一緒じゃない？

竹林ユウマ: ああ。近いかもしれん。あれ？これあれか？レギュラーか？今ちょっとこっちに戻してみる。いや、こっちじゃね。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: これレグ左違う。右がレギュラーで左がライト。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: やっぱなんかさ、全とかなんかああいうリリシ印象を持たせるならやっぱ細いウェイトが細い方が落ち着きがあるね。

安部和音: うん。うん。

高橋英信: そうね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 戻してみて。

竹林ユウマ: レギュラーちょっと力強いさ。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: サぬ感出ない。

安部和音: まあね。うん。ふんふん。ふんふんふんふんふん。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: ちょっと待って。色が色が気に食わん。

安部和音: ちょっとアンドレードでパパやってくんで後で。そう、色ちょっと。うん。

00:25:17

竹林ユウマ: うん。土っぽい感じ。サ度が高いのか。割とがつつり落としてみてもいいかも。
安部和音: うん。うん。ま、がつつり落としたらさ、結構白とか使えるようになったらおもしろいよな。

竹林ユウマ: うん。確かに。

安部和音: こういう

竹林ユウマ: うん。もうちょい黄色。こんくらいじゃない？うん。

高橋英信: はい。

安部和音: なんかピってさ、色綺麗に感じない？そうだ。

竹林ユウマ: うん。うん。なんだあれ？ま、UI が洗練されてるからじゃない？ちょっとアクセントから置いてみるわ。

高橋英信: はい。

安部和音: あのさ、なんだろう。あのダウ変えたら音が良くなった気がするみたいなさ。うん。

竹林ユウマ: 根いいね。

安部和音: おお、行けるやん。

竹林ユウマ: ちょっと1回他の色展開も。あ、めっちゃ良くな。

高橋英信: ああ、すごい。

安部和音: うん。ふ。

竹林ユウマ: うーん。

安部和音: ま、普通に考えたら真っ白だろうな。

竹林ユウマ: オケ。あ、いいや。

00:27:14

安部和音: うん。

竹林ユウマ: いいね。

安部和音: あ、ちょっと味欲しいな、この茶色。

竹林ユウマ: オケー。

安部和音: そっちな。色彩感覚が近すぎる。ああ、でもそっか。うん。

竹林ユウマ: こいちょっと待て。

安部和音: ふーん。も茶色戻しといた方がいいわ。どっか置いと置いといた方がいい。ふんふんふん。ま、ありなんだけど、多分メイン、メインのバックグラウンドカラーがもうちょい赤っぽく断食っぽいと他にない感じもする気もする。

竹林ユウマ: うん。うん。これがもうちょい断食。

安部和音: うん。うん。うん。うん。

高橋英信: ああ。はい。はい。はい。はい。

竹林ユウマ: うーん。なるほど。

安部和音: まあ、ちょっとでもなんか、ま、こうやって遊べる余地がある。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: こう本当だなあというか。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。ま、そうだね。

00:28:41

竹林ユウマ: やっぱうん。

安部和音: うん。ま、この上にカラーでこう細かい人格調整ができるからすごくいいんじゃないかな、このフォントは。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。そうね。

安部和音: で、ちょっとあれして。あ、ごめん。黄色ない気がすんな。なんかなんかなんか黄色じゃない気がする。

竹林ユウマ: なんだよ。

安部和音: ブディオ黄色すげえな。でもこのめちゃめちゃあれだね。こんなベタ塗りの色使えるんだな。このおもしろいな。

竹林ユウマ: うん。黄色を、ま、緑系にしてみるか。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 侵力とかうん。

安部和音: 逆にこういうの好きだけどね。

竹林ユウマ: 渋すぎるか。

高橋英信: はい。

安部和音: おもしろいな。ああ、なるほどね。なるほどね。

竹林ユウマ: うん。まあでも色の展開はできそうだね。

安部和音: うん。めっちゃいい。

竹林ユウマ: うん。

00:30:02

竹林ユウマ: なんか頭の中にあるイメージ、ブランドのイメージ像として、あ、イメージというか、ま、近しいかなっていうブランドの像としてやっぱシグマシグマの

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。そうっすね。

竹林ユウマ: あのプロムジャパザワールド感あるだ。ズっていうなんて言うの？土着文化もすごい大事にしつつ世界的に評価されてるブランドのベンチマークとしてアイズ合津若松のグはそうそうそうそうそう合図だからえなんかアースカラー

安部和音: 合図。ああ。あ、アイズが松なんだ。へえ。へえ。

竹林ユウマ: ていうかその有気的な配色ま自然界にもありそうな色ううん。

安部和音: うん。なるほどな。なるほど。これや、こっち全りしてもいいかもな。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。そう。そう。そう。

竹林ユウマ: なんかさ、かさんがやりたいことってさ、まだこの良さに到達できてない人を、まあ、なんて言うの？ 気づかせてあげるといとか、
高橋英信: はい。
竹林ユウマ: ま、その、ま、出発口じゃん。

00:31:16

竹林ユウマ: スタートラインというか空港とかステーションとかなんかそういう印象があって、ま、それって別以外でもさ、おそらくかさんは店舗展開したらそういうことをやりたいのになって思ってた、ま、それが別府から博多に行こうが例えばカラツとかのそういう場所に、まあ、2店舗目、3店舗目
安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。
高橋英信: ち
竹林ユウマ: を展開してもやっぱりその土着文化みたいなのは大事にするようなブランドな気がしてって。うん。だからうん。降りていく。ああ。はいはいはい。うん。あ、もうちょいライトになってことね。うん。うん。うん。うん。うん。うん。や。
安部和音: うん。うん。うん。うん。で、で、俺が結構想像してたのがもっともっと降りていく感じだったのよ、マスに。ま、本当空港みたいななんか吉の屋があるみたいな。しと、あの、なんだ、金が混在してる空間みたいなさ、ま、話だったんだけど、でもホテルって考えた時にみんな止まりたいのっ
竹林ユウマ: うん。
高橋英信: あ。
竹林ユウマ: うん。
安部和音: てブランドデザインってシグマじゃん。

00:32:23

竹林ユウマ: うん。うーん。
安部和音: なんか安いシグマなんだよな、多分。
竹林ユウマ: うん。まあ、そうだかもな。うん。うん。うん。ま、洗練されてる感はあるから、ま、そういう空間に身を投じたいみたいなのは、ま、基本的な宿泊施設への欲求としてある
高橋英信: うん。
安部和音: うん。うん。
竹林ユウマ: だろうね。
安部和音: で、うん。
竹林ユウマ: ま、これってことよね。これが必要ってことね。
安部和音: なるほど。そうだね。なるほど。こんな話したっけ？ これ何だっけ？ うん。
竹林ユウマ: したよ。これかさんの事務所でこの話してて。

安部和音: そうだな。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: あ、でもそうだな。これはでもそうかもしれない。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: なんか俺がやろうとしてたのって B スポークホテルみたいになるなって思って。

竹林ユウマ: うん。うん。何?ホテルビースフォーク。あ、どうやってやん。

安部和音: B、B スポーク。

00:33:21

安部和音: あ、さ、画面共有。これさ、全画面共有にできない。全体の画面みたいな。共有で画面全体みたいな。え、ない。

竹林ユウマ: 年表。

安部和音: あ、1回じゃあ配信切ってで、もう1回画面を共有ボタン押して画面全体はいはいうそうそう新宿にあんだけど。あ、ビスポークか。なんかさ、こすげえっこいい。

竹林ユウマ: うん。ああ。はい。はい。はい。スポークホテル。ああ。ああ。うん。

安部和音: カッコいいの建築もなんかこうこうなっちゃったらなんかこうなんかねごでそれ以上得られなかいホテルでアメニティとかも素晴らしいんだけどそれ以上がないっていうそうそうなんか安く止まりたい

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。ま、言いたいことは分かるわ。うん。うん。うん。いや。

高橋英信: あ

竹林ユウマ: うん。まあなんかうん。

00:34:42

竹林ユウマ: 目指そうとした場所はなんとなく想像できるな。あ、もはいはいはい。

安部和音: 時にここに止まったら自尊心を保てるみたいなアパイメージなの。でもそれって必要ないよね。世の中にとって思っそうそう世の中に必要ないっていうか別にそれぞれって俺らの汗と使ってやることじゃないよねっていうか切っちゃった方がカッコいいっすね。

竹林ユウマ: ああ、分かるわ。うん。

高橋英信: よし。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: なんかその箱の写真めっちゃいいなと思ってぶ取りの写真がすごいフェグマのそれ質感みたいなやっぱり質感ね。

竹林ユウマ: これね。うん。やっぱアースカラーじゃない?ここら辺。

安部和音: アンカラープラスザラザラとかうん。わ、やだ。なんかその、え、この端的すぎるだろ。この Google 検索のひどい。これや、このページ地獄や。

竹林ユウマ: まあ大まこっち系だよね。こっち系じゃない。

安部和音: うん。

高橋英信: うん。

安部和音: いや、プラス質感テクスチャ。

竹林ユウマ: うん。

00:36:03

竹林ユウマ: うん。うん。うん。そうね。

安部和音: この箱のさ、マだらとかさとかをクリエイティブに使うとものすごいよね。

竹林ユウマ: うん。はい。うん。な、何て言うんだろう。ま、1個、ま、デジタルでもやっぱこういう質感の表現はしてもいいのかなって思ってた。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: ネスティングあるじゃん。

安部和音: んええ。

竹林ユウマ: ネスティング。

安部和音: ああ。

竹林ユウマ: あのビズハニーがやってたやつ。

安部和音: うちのネスティングか。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。そうなんすよね。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: ここ結構うまいなと思って。ま、一見単一な塔に見えるんだけど、こう地味にテクスチャーが入ってんね。うん。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: で、ここで、ま、全体相対で見る印象は完全なデジタルなんだけど、ま、と々そのフィジカルアナログ的な要素が表現されてる。ま、なんかこういうことはやってもいいかなと。

00:37:09

安部和音: ネスなん、なんかちょっと違う授業やってんのな。そうな。あのアプリで作る。あ、あれビルドだ。うん。ふんふん。なるほど。

竹林ユウマ: え、でもネス君毎回これじゃない？この自分で組み立てるみたいな家じゃない？うん。ああ、そうね。うん。ま、こんな感じかな。うん。ま、この思想ブラッシュアップしていくタイミングでまたこれらがバージョン2とかに進化はしていきだろうけど、ま、出発地点としてうん。

安部和音: そう。まあなんかうん。ムード、ムードの1枚ぐらいをこうやって作っという方がいい

いかな。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: さ野さんのミーティングに合わせて、うん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。そやね。あと何だっけな。もうちょいリサーチしたんだよな。ああ、そうだ。ま、とはいえ、あの、リッチにしすぎるとライト層が寄りつかないっていう懸念もありそうだなって思ってた、ま、要はこの感じでグリッド

安部和音: うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: デザインで超ミニマルですみたいなのをやるとちょっと尖がりすぎで、その、ま、ライト層の手に届かないみたいなありそう。

00:38:31

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: ま、かさんさっき言った話だとそっちに振り切ってもいいんじゃないかみたいなことだったと思うんだけど、ま、なんかイラストとかスケッチで

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: いいバランス取れそうだなと思ってて、例えばうん。

安部和音: うん。うん。うん。なんかさ、ちょうど思ったんすけど、そういえばさ、俺もちょっとピンタレスのさ、ボード作ってて、竹林君今招待した。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: てか竹林君に招待されてたよね。

竹林ユウマ: うん。知ってるね。ちょっと待って。

安部和音: うん。なるほど。そういうイラストか。

竹林ユウマ: あのさ、ま、リフレットとかでさ、ま、マップみたいなのもさ、作る機会が多分出てくるじゃん。

安部和音: はいはいはいはい。ああ、確かに。あ、そうじゃん。なんかそれが裏にあの写真の裏とかにかぶってるぐらいの感じ。

竹林ユウマ: あ、その、あ、こういう、こういうイメージ。これちょっと地索図だけどさ。

00:39:37

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: なんかイラストしむ

安部和音: むずいな。も、なんかもでかいかも。めっちゃでかくしてみて。で、なんか右ってちょっとこれなんかトリミングみたいな。

竹林ユウマ: ダブルクリうん。

安部和音: ま、雑にやると、ま、こんな感じかな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: これが透明度的にはこれ何?透明度どうやっていじんの?これ。

竹林ユウマ: うん。うん。外見ってところの100% っていう数値を下げていけば

安部和音: あ、これこれはああ、なるほどね。ちょっと強いんだ。こうなると。あ、なんかあれみたいになるな。なんかこの浮きみたいになる。

竹林ユウマ: うーん。1回そう。いや、でもちょっと射実的すぎるか。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: なんかある程度の中小度うん。

安部和音: もうちょいミニマルな感じがいいかも。なんかさ、あ、そう。俺のピントレスのボード見て欲しいんだけどさ。

竹林ユウマ: うんとか。

安部和音: 多分さっき招待したやつある。小文字のアムが通知に来てるかもないじゃん。

00:41:49

安部和音: それか。それだ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: なんかなんかね、アムと言いながらこういううん。

竹林ユウマ: ああ、こっち系ね。うん。うん。アブストラクトな感じね。

安部和音: 感じとかもありかなって一瞬思ったのとかっこよ。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。お、なるほどね。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: ま、方向性としては全然考えられるありそうではある。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: ちょっとわからん。

安部和音: うん。キャラがだいぶ変わるね。すごい。すごい。

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: はい。

安部和音: 洗練感はやばいけどね。

竹林ユウマ: ん? うん。

安部和音: 洗練されてる感はやばいけどね。ただキャラがうん、キャラがね。

竹林ユウマ: あ、バランスじゃね。なんかちょっと違くない? うん。

安部和音: あ、で、その、ま、ちょっと言いたかったのはとボードの中にその青いやつあるじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

00:43:13

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: ま、これでキャラバランス取れるかなって思ったんだよね。このこういう色遣いを例えばファーストビューは入れないんだけどスクロールしたら急にこういう英語が出てくるとか急にこういうパスで書いたみたいなあのアイコン

竹林ユウマ: ああ。うん。うん。うん。うん。はい。はい。はい。はい。うん。

安部和音: が出てくるとかでまた戻るみたいな日本語の文章に戻る時にみたいな変遷とかあ、程度であると多いかなって思った。

竹林ユウマ: なるほど。ふんふん。ふん。ふん。ふんふん。うん。なるほど。

安部和音: デジタルはね、デジタルはちゃんとやっていきやなんて言うんだろうな。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 捨てたくないんだよね。デジタルは。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。なるほど。

安部和音: で、そのデジタルをやると洗からもう少しポップによるじゃん。

竹林ユウマ: うん。まあ、バランスは取れそうだね。

00:44:20

高橋英信: うん。

安部和音: ぐらいのバランス感覚。

竹林ユウマ: はい。はい。はい。うん。

安部和音: あ、その1番上とか好きだけどね。

竹林ユウマ: これ、これ一緒やない。

安部和音: え、1番上。

竹林ユウマ: これ。

安部和音: ああ。

竹林ユウマ: これ動画すぎでしょ。

安部和音: さ、こ、いや、わかんない。なんかそれがさ、モダンとか言ってる中に入ってきたらさ、深くない?ていうかやっぱそのなんかあのさ、デジタル超強い人たちがやるさわってくそかっこいいじゃん。

竹林ユウマ: ああ、じゃあほん科学系か。

高橋英信: Ja

竹林ユウマ: うん。うん。ああ、そのなんかとてつもない意味と思想が込められてるんじゃないかっていうこと。うん。うん。はい。はい。はい。はい。はい。ああ、ちょっと待って。分かるかも。分かるわかる。あれだわ。息の息の構造。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

00:45:21

竹林ユウマ: あれ? これだっけ? これか? 敵の構造のなんか図鑑がある。これ。これどうよ

? ちょっと読んだ。

安部和音: あったね。これあったね。はい。はい。はい。息の構想読んだのお前?俺、俺も読んだわ。

竹林ユウマ: えっと、まあでもこれ漢字だからちょっとは感が出すぎちゃうかもだけど。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: まあ、ちょっと学術的な見え方になるよね。

安部和音: 息とか演技とかさ。

竹林ユウマ: うん。えっと、じゃあうんうん。

安部和音: え、なんかさ、これプラスあれだよ。デジタルカラーだよ。

竹林ユウマ: うん。ちょっと待って。一旦 LP みたいなもの作ってんだ。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: デジタルカラーじゃ一旦こいつうん。

安部和音: えっと、ファーストビューはさっきのでもいいかも。その、そう、そう、スチールとあのフォントとで見せる感じ。そう、それもなしの。そう、そう、そう。

竹林ユウマ: あーはいはいはいはい。なるほど。うん。チルトコントー一旦じゃあこいつ外します。

安部和音: それでうん。

00:47:06

竹林ユウマ: ちょっと色の外すは1回。うん。

安部和音: これからのうん。

竹林ユウマ: ちょっと背景の色1回いじっていい?うん。

安部和音: うわあ、寒。なんかあのやろうとしてることはね、台の大人がやっていい感じじゃないね。

高橋英信: だっ

安部和音: そう、そう、そう、そう。これをうん。

竹林ユウマ: ああ。うん。

安部和音: さっきの青にしてみて。

竹林ユウマ: あれどこ行った?

安部和音: なんか暗くなってるんじゃないの? なってないんか

竹林ユウマ: これ色反転とかできないかな?うん。

安部和音: まあまあでもそんなイメージ。

竹林ユウマ: うん。はい。はい。はい。

安部和音: あ、これをなんかな。ああ。はいはいはい。台の大人が本当にやっちゃいけない感じになって四角するみたい。うん。うん。

竹林ユウマ: ああ、なるほどね。なるほど。

安部和音: なんか流れていって消えるぐらいの感じ。スクロールしたらこれが出てきて流れてって消えるぐらいのいやいやでもなんかいけるいけるけど色はもう熟行

竹林ユウマ: ああ、はあ、はんはんは。

00:50:10

竹林ユウマ: むずいな。うん。行ける？行けて。うん。

安部和音: した方がいいかな。

竹林ユウマ: あれじゃねかボタンとかにすればいいんじゃない？角丸ってどうやってやるんですか？これか？レザベーション。

安部和音: うーん。はい。はい。はい。はい。はい。はい。そんな感じっす。

高橋英信: よし。

安部和音: うん。おお、なるほど。

竹林ユウマ: ちょっと待って。もうちょいうまくやれるはず。

安部和音: うわ、なんか超かっこいい。ドロップシャード行けそうな気がする。俺ももはや絶対違う。

竹林ユウマ: ちょっとあれ、あれじゃない？なんかうん。

安部和音: 絶対違うね。あ、ま、これもありか。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: これさ、さ野さんに何言ってるかわかんさ野さん何言ってくかわかんないんじゃないかな。俺たちがやってること。

竹林ユウマ: どういう文脈を経てこれになったってなりそうだね。

安部和音: そうだね。はいはいはいはい。かっこいいね。あ、細い方がいいね。うん。うん。うん。でもこのこれはマジやばいけど。

00:51:52

竹林ユウマ: うん。ちょ、しそ強ええ。

安部和音: あ、でもなんかさ、息とか演技とかをつな1本の1000ぐらいのとかでもいいよね。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。はい。はい。はい。ちょっと待って。なんかこれっぽいやつをピンタレスを探してみるか。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: お。

安部和音: 超こだわってんな。いいね。これぐらいこだわるとね、いい気がするね。

竹林ユウマ: うん。大丈夫。これさに詰められない文脈があるんですか？文脈ありますか？これ。

安部和音: 詰められるね。いや、でもないっすよ、こんなのって言えるからね。佐野さんってさ、結構さ、めっちゃ方向性準だから、なんか、あの、るタイプだからさ、キャラを。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。あ、自分をああ。

安部和音: うん。

00:53:22

安部和音: なんか例えばぬくメルとかもそうじゃん。なんかぬくメルの人格すごかったじゃん。人格をすごい浮かんでたじゃん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: やばい。やばい。そ、後ろとか書いて何？その後ろ後ろとか書いてるやつあった？下に。

竹林ユウマ: ん、これじゃない。これ、これか。うん。うーん。

安部和音: いや、違う。あ、そう。そ、ミシンか。あ、でもなんかさ、それで言ったらやっぱ中国クリエイティブだよね。こう前のまあでもさ、なんか

竹林ユウマ: なるほど。うん。

安部和音: ま、めっちゃ分かりやすくこういうのでやっていいかもね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: こういうのもいいかしんない。

竹林ユウマ: どういうの？やばい。

安部和音: あ、今チャットに貼ったわ。あ、フィグマに貼った方があれだな。

竹林ユウマ: 無限回路になってる。うん。

高橋英信: Ja

安部和音: 普通にのにこれとかもかっこいいしね。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。なんか俺が昔作ったに似てるな。

00:54:57

安部和音: うん。早出てくんの？ふんふんふん。

竹林ユウマ: ん、これ。あ、変えられないのか。

安部和音: パスにパスにすればいいんじゃない？それって。

竹林ユウマ: か。いや、だめだ。

安部和音: あ、そうなんや。

竹林ユウマ: うーん。まあどうしようね。いや、別の方向性もありだと思うんだけど、ま、多分1店舗目作ってその先の展開まで考えた方がいい気はしてて、例えば

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: 、ま、うーとああ、色んな話だね。

安部和音: それって色の話？色の話でいくとその青がランダムに切り替わってもいいかなって。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。あ、今ああ、なるほどね。なるほどなるほど。

安部和音: そのシチュレーションがランダムとかでもいい。開くたびにみたいなの。うん。

竹林ユウマ: いや、なんか俺が言ってんのは例えばアムのベースのブランド、ブランドトーンがま、これだとすんじゃん。

00:56:39

安部和音: うん。うん。

高橋英信: うん

安部和音: うん。

竹林ユウマ: これに麻雀白とかで1店舗目がま、根壁だから。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: あ、これ邪魔。あ。

高橋英信: 。

安部和音: そいつめっちゃ端っこでもいいと思う。

竹林ユウマ: くそ。

安部和音: 俺なんか左下に隠したよ。

竹林ユウマ: ま、これ1店舗目、ま、2店舗目みたいな感じで、そのアムアムのベースのブランドはアースカラーのこの、ま、言ったら無色系で、え、店舗

安部和音: うん。うん。ふん。うん。ふん。

竹林ユウマ: ごとにその色を分けていくっていうのをもやるとしたら多分それベースでその配色の設計とかをした方がうん。なんか後々困る気がするんだよね。なんか緑ピンクか。

安部和音: ふん。ふん。うん。ふん。ふん。うん。バングラです。

竹林ユウマ: 紫色。うん。うーん。なるほど。うん。うん。ホテル。

安部和音: あ、まあなんかでもそれで言ったらなんか色で勝手に始められたけど色じゃねえなって思ってる。

00:58:45

安部和音: 色展開じゃないだ。俺が展開に関してはもうシェアホテルが1番俺の中ではうん。

竹林ユウマ: シェアホテル。ああ。ああ。ああ。ああ。あ、うん。シェアホテルやつね。うん。うん。うん。うん。

安部和音: シェシェアホテルズ。うん。あいつらでこいつらはコンセプトがフードでそれに対して建築でアプローチしてる色とかではなくて

竹林ユウマ: うん。うん。うん。一応色でも区別はしてるつって感じよね。

安部和音: うん。これってそうなんかな？なんかあるべきじゃない？色を使う使わないもんこの人たちがやってるイメージ。

竹林ユウマ: いや、多分そうだと思う。まあでもうん。

安部和音: 色使った方がいいから使ってるみたいな感じがするんだよ。

竹林ユウマ: なるほど。

安部和音: そうそう。ほら色で分けてないじゃん。つぐとかもさ、今のつぐとかもフォントめっちゃ変えてるやん。

竹林ユウマ: そうだね。うん。うん。うん。うん。うん。ま、色を第一の派生のアイデンティティにはしてないか。

01:00:08

安部和音: っていう感じかなって展開をた時。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。なるほど。

安部和音: うん。だから、まあ色でどうったらいいかも。

竹林ユウマ: はい。うん。うん。はい。はい。はい。

安部和音: いや、めっちゃカッコいいんだけど。色で展開させんのも。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: でもなんかさ、それってお前がやりたいだけじゃんみたいなさ、なんかこうそうそうそう。そのなんかね、めっちゃね、だったウェブサイトがあるんだけど、どれだったかわかんねえんだよな。

竹林ユウマ: うん。はい。はい。はい。なるほど。なんだ？

安部和音: 広告代理店かなんかだったんだよな。何だっけな？誰がやってる広告でなった？あ、俺フォロバーされてるわ。フォロワー見ればいいよ。ニュースみたいな人だった気がするけど。違うか。

竹林ユウマ: これ、これの、これ今画面見えてんのか？これに奇抜なビビットカラーをアクセントで足して宿泊業宿泊版みたい感じ

01:01:48

安部和音: うん。おおか。うん。ふん。すげえな。ロゴやばすぎんだろ。

竹林ユウマ: やだよね。

安部和音: ロゴやば。

竹林ユウマ: うん。いや、結構 DTL を見ても割と尖ったことしてるんだよな。

安部和音: うん。あ、でもね、やってることはね、結構好きかも。だってさ、フィルムで質感のぶ取りみたいなさとか。

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: 確かに。うん。うん。うん。

安部和音: あ、フィルムで取ろうよ。フィルムカメラで取ろうよ。なんかこういうあのさ、眼フで取る感じのぶ取りとかをフィルムで撮りたいかも。あ、でもフィルムで撮った感を出したくないみたいな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。全然あり。うん。うん。はい。はい。分かる。分かる。ま、それは全然行けそうやね。

安部和音: あった。あ、やっぱニュースだ。

竹林ユウマ: 送ってくれ。

01:03:01

安部和音: ちょっと待ってな。あ、だいぶ変わっちゃった気がするな。なんか変わってる気がする。リンクはこれリンクにできないの？あ、開くで。ええ、なんかね、スマホのウェブの方かな？スマホかな？すごかったんだよね。こいつらさ、あの、変わっちゃったんだと思うな、ウェブが。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: ちょっと待って。ニュースインクスマホで調べるわ。あ、変わっちゃってるわ。えっとね、めっちゃビズハニみたいなウェブサイトあったのよ。

竹林ユウマ: はい。はい。はい。

安部和音: で、あの、ハンバーガーメニューとか触った瞬間だけこの色に光るみたいな。

竹林ユウマ: なるほど。

安部和音: みたいなやり方すごい好きで、でもなんかそんな感じだなみたいな。で、ハンバーガーメニュー触ってメニューメニューホバーするじゃん。ホバーしたらこう消えていくみたいな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

01:04:21

竹林ユウマ: うん。理解した。うん。

安部和音: み蛍光緑があここう消えてくみたい。

竹林ユウマ: ちょっと待って。俺の俺の Chrome のウィンドウがどっか行っちゃった。ほぼしたら。

安部和音: あ、ほぼしたらだから1秒ぐらいで消えてなくなるみたいな。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: 音の感じに戻るみたいな。

竹林ユウマ: ああ。うん。なるほど。

安部和音: 右から左に流れてって、また白と黒のサイトに戻るみたいなことを確かやって、なんか、なんか俺もさ、あ、てだからなんか

竹林ユウマ: うん。はい。はい。はい。はい。はい。なるほどね。うん。

安部和音: これをやってる人、このニュースって会社の人たってやっぱ俺たちはデジタル側の人間だよなっていう自覚があるんだろうなって思って。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: で、俺も結なんだよね、やっぱり。

竹林ユウマ: うーん。うん。うん。うん。うん。なるほど。

01:05:46

安部和音: いや、だからだからとかホテルだからっていうところでそこに媚びたくないみたいなところをそこで出すはやりたい。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。なるほど。ちょっとアバンギャルドな要素を取り入れるみたいな感じなんかな。

安部和音: うん。それで言ったら今のあのフィグマページ1枚へはすごく納得している。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。なるほど。

安部和音: うん。このバランス感覚はね、凄まじくね、俺がやりたいことかもしれない。

竹林ユウマ: うん。はい。ふん。

安部和音: で、これをその色のイメージやっぱ出ちゃうじゃん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: これだと。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: だからやっぱランダムかな。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: もうグラデーションしちゃってもいいかもしんないんだけど。

竹林ユウマ: ランダム。ま、ホバーするたびに色が変わるってことよね。

安部和音: まとかずっとグラデーションしてるとかあのサチュレーションでとグラデーションするとかうん。

01:06:51

竹林ユウマ: うん。ああ、なるほど。うん。なるほどね。

安部和音: でもめっちゃしれっとやるみたいな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。まあ、ちょ、言いたいことは分かるわ。イメージはできた。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: まあ、いいんじゃないか。まあ、あれだね。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 建築とのずれみたいなのは解消するべきなのか、ま、放置していいのか。

安部和音: うん。うん。うん。だからそれで言ったらなんかのとかにアブストラクト入れるかのをもうそういう発色で染み上げるような人におめ。

竹林ユウマ: うん。ああ、なるほどね。うーん。それ建築家のおじいちゃん泣かないかな？ いや、方向性はいいんだと思うけど、まだあの物件に完璧にマッチするイメージがちょっと

できないな。

安部和音: うん。泣くだろうね。うん。ま、逆になんか馴染ませていったらいいんじゃない？
いろんなもので。

竹林ユウマ: うん。

01:08:22

竹林ユウマ: うん。うん。ま、じゃ、一旦これは忘れていいか？この色リビットカラー、これ一旦デジタル上での、ま、ワンアクセントとしての表現に一旦置いといて、ま

安部和音: うん。うん。ふん。なるほどな。うん。ふん。うん。うん。うん。うん。うん。ま、それでもいいかも。なんか引っ張られるんでしょ、多分。このまま行ったら。うん。

竹林ユウマ: 、これは、ま、一旦やると仮定して、で、まずこいつらがいない状態でまずブランドトーンを完成させあげて、最後になんか民ト添えるみたいな感じの考え方でいいんじゃないうん。引っ張られそう。そっちに行っちゃいそうだから。あのスポーティーストリートアバンギャルドみたいな感じに行っちゃいそうだから。

安部和音: はい。はい。あ、ま、ま、あとレンで行くと、あの、ピンタレス開いてほしい。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: あの、ボード、ボードで、ま、ちょっと遊びたいよねっていうので、ウェ、ウェーブしてるとかね、こういう、こういう、こういう遊び方とか

竹林ユウマ: ちょっと待ってね。はい。はい。はい。はい。なるほどね。ああ、めっちゃいいと思う。うん。うん。うん。うん。いや、いいんじゃないですか。うん。うん。

01:09:35

安部和音: をで、なんか俺のアム許せるアムがあ、その木のやつめっちゃかっこいいんだよね。その上の上のそのあ、違う。

竹林ユウマ: これ何？ああ、すげえな。遊んでんな。遊んでるな。でもこれ意外と金がかがかんそうだよ。アイデアの勝利だ。

安部和音: 四角のえっとスクロールして上。いや、違う。それ猫カットすごい。これなこれやばいなど。うん。そうなんだよ。俺も思った。金かかんねえじゃん。これ天才な。マジそう。本当に天才だと思ったこれ。うわ、右上のやつとかおもしろいな。あ、違う。うん。それ、え、面白。ふーん。ま、いい。いや、ふんだよ。本当に。建築かってなんかこういかに外しながらいかに綺麗にやるかだからさ。

高橋英信: あ。

竹林ユウマ: うん。これね、これじゃないの？あれ？うん。ハーフね。うん。

安部和音: ま、でもなんか俺の許せるアムのアでいいグラフィックはさっきの連のウェブぐらい許せる。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

01:11:00

竹林ユウマ: 許せるグラフィックっていうのはうん。

安部和音: だからその例えば俺言ったじゃん。そのアムにアムって言って糸が糸とか出てきたらそ寒いよねって話。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: ブセルラインがこのウェーブだね。ベジェぐらいのかも連の形だけで使ってますみたいなぐらいのもの。うん。はい。

竹林ユウマ: ああ。なるほどね。そのアムうん。うん。うん。なるほど。理解したわ。じゃあだいたいアム要素は捨てた方がいいね。うん。うん。うん。

安部和音: なんかもうやってることがなくなるからなくていいよ、もうていう。そうそうそう。アムって感じるものだからみたいな。

竹林ユウマ: うん。ま、そっか。うん。そういうことね。いちいち伝える必要もなし。ああ。ああ。いや、ま、い、言ってることは分かる。うん。うん。ま、わざうん。うん。うん。うん。うん。うん。はい。はい。はい。はい。はい。はい。はい。はい。なるほど。ああ、なんだろうな。

01:11:50

安部和音: そうそうそう。そんなそういう

高橋英信: お

安部和音: はい。だから言葉でも説明したくないし。だから俺はだから息でしょ。演技でしょ。野望でしょ。置きたいよね。だからみたいな話。あ、いいね。なんかゆんぐ、ユングみたいじゃない?ヤゴ。この息と野望と渋味って何なの?うん。

竹林ユウマ: わからん。おの構造挫折したから。

安部和音: あ、そうだ。あ、そう。俺も読めなかったわ、あの人の文章。

竹林ユウマ: うん。いや、俺初犯のやつ買ったんよ。

安部和音: うん。俺もだよ。多分同じやつ持ってる。お前青いやつ。うん。ええ。すご。

竹林ユウマ: うん。めっちゃ文章。あ、いや、もうフル本屋。浅草のフル本屋で買った。もうなんか髪がカピカピのワシみたいになってるやつ。うん。ま、イメージはできたけど、もうちょいあれだね。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 今イメージできてるけど、明日には忘れそうなんぐらいうっすらしてるから、もうちょい。

安部和音: ま、でもそうなんだよな。ま、でもあれじゃない?この録画を見返せばうん。

01:13:17

竹林ユウマ: うん。うん。うん。ま、そ、そうか。ま、とりあえず、ま、まとめると、えっと、うーん、ま、フォントはまずヒューマニスト系で間違いなさそうじゃん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: で、それに対して、え、ま、土着フードを大切にしていきたいっていうちょっと古風な思想を持ちつつも、ま、自ら民長隊を選ぶっ

安部和音: うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: ていう、そういう風におずと自ら見せていくみたいな行動はしない。

安部和音: うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: うん。あくまで親しみやすいまプロプラットフォーム的な要素を持ち持っているで洗練されたグリッドデザインここまではまず結構確定要素でいいのかなと思っててでそれに

安部和音: うん。うん。うん。うん。はい。

竹林ユウマ: プラスでこいつの役割なんだろうアクセントに入んのかなこれうん。

安部和音: うん。あ、でもなんかなんかさ、これってさ、き違えの哲学みたいな話じゃん。

01:14:32

竹林ユウマ: うん。うん。うん。もうきの手だね。

安部和音: で、きの哲学って俺ん中でもう1個てハーケンの代表の文章なんだよね。うん。

竹林ユウマ: うん。うん。ああ。はい。は一けんね。あ、またじゃなかった。ま、に説明をする
と、ま、ハーケンブランドのデザイン会社なんかな、これは。

高橋英信: はい。

安部和音: コンサルかな？ブランドコンサルでいいかな？なんか小説なんだよな。

竹林ユウマ: うん。そう。なんか物語を紡ぐようにね、丁寧な言葉遣いで文章が書かれて
て、ま、コピーが優秀すぎるウェブサイトがあっとうん。

高橋英信: うん。うん。

安部和音: てかなんか読んでたらふつつつとこう燃えてくるみたいな。

竹林ユウマ: うん。うん。

高橋英信: このサイトは何のサイトなのというと。

安部和音: コーポレートサイトのサイト明してないんだけど。

竹林ユウマ: うん。は一けんっていう、ま、ブランドコンサルファームのその会社の説明サイ
ト、説明をサイトうん。

高橋英信: ああ。うん。

01:15:47

竹林ユウマ: ま、ポートフォリオサイトみたいな感じでしょ。

安部和音: ま、ポートフォリオがあるプラス謎のしょ、謎のむちゃくちゃ熱い文章を読まされて終わるサイトなんだけど。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 6個上か。これマジやばいよな、この人。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: この人マジやばいよな。

竹林ユウマ: まあうん。

安部和音: ね、なんか、ま、じゃ、ビズハニーでもさ、スタジオディテールズでもさ、ガーデン8ですらもさ、見たことないような多分人なんだよ、

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: この人。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: むちゃくちゃ怖い人だと思うんだよね。

竹林ユウマ: はい。

安部和音: なん、なんかもう画が強いつか世界観が強すぎるみたいなの。

竹林ユウマ: はい。はい。うん。なるほど。

安部和音: いうのも面白いのかなってちょっと思ったの。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: その息、息と演技とじゃあヤボとかをさ、こう俺たちでこういう定例で議論して出来上がった三角形を図形にして置いとくとか俺たち常識

01:16:54

竹林ユウマ: うん。うん。ああ。はい。はい。

安部和音: みたいになっていうのを今のその息の構造の図鑑みたいなのとやってることが一緒だなと思って。なんかそでもなんかそのバランスの置き方ってブランドアーキテクチャのブランドアーキテクチャをさらに俺たち言語で作るみたいなのはをやるとめっちゃめっちゃいい世界観になるんじゃないかなと思って。なんかそういう話をするのはちょっと面白いんじゃないかっていう。

竹林ユウマ: なるほどね。うん。うん。うん。うん。うん。

高橋英信: お

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。はい。はい。はい。はい。はい。うん。

安部和音: いや、あります。

竹林ユウマ: ま、独自性はめっちゃ出そう。

安部和音: うん。うん。うん。うん。まあね、なるね。だ、だけどさ、その意味を理解しなくても楽しめるものにすればいいんじゃないかと思ってんだよね。

竹林ユウマ: ま、唯一無理な表現にはなりそうだけど、1個懸念してんのがその、ま、そもそ

もの宿のターゲット層が置き去りにならないか。

01:18:06

竹林ユウマ: うん。ああ、なるほどね。

安部和音: だからそれをリフレットに満足乗せるとかじゃなくて、え、な、な、何だったの? 今のみたいな帰ってっただけみたいないでいいんじゃないかな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。はい。はい。はい。はい。ああ、なんかいい感じの本あった。

安部和音: なんかさ、そのこの1枚円を作るのに普通は学校に行ってデザインを学んで色を学んで本当を学んでやるんだけどたちはなぜか息と演技とヤボについて話ただけでこのデザインになったみたいな話。え、なんかよくあるじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。ああ。はい。はい。はい。はい。ああ。

安部和音: なんかよくさ、あ、なんか俺らでさ、デザイン作る時にさ、アウトローだねとかさ、これヒーローじゃんとかさ、そうやって作ってっただじゃん

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。

01:18:59

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: 。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: そんな感じかな。で、それがなんかこうちょっとクリエイティブに出るとかっこいいなって思ってるしブランド展開する時にこのフードはなんかそういう話し方をする事で俺たちの表現になるんじゃないかなっていうそのフードを俺たちの表現にテンプレートできるんじゃないかっていうでそれを考えてい

竹林ユウマ: うん。うん。ああ、理解した。なるほどね。はい。はい。はい。はい。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: のがなんかアムっていうデベロップメントみたいな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: で、これはそのホテルとかアムっていうブランドとはっていう話。

竹林ユウマ: で、面白いと思う。面白いと思う。

安部和音: それを少しクリクリエイティブに載せるのはちょっと面白いんじゃないかなっていう。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: そしたらなんかアブストラクトな図形になったりとか線になったりとか1本の線だよねとかいう話してんだけど1本の線だ

01:20:04

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: けどちょっと歪んでるよねみたいな話になったりとかクリエイティブに落とし込めるんかなみたいうん。本当にそうだけど、もうここは置いてっていいかなと思ってんだよね。なんかあのさ、多分ね、俺らより若いやつってさ、こんな感じでやばいの作っちゃうやつらっぱいいと思うんだよ。なんか狂ってんじゃん。こいつらみたいさ。

竹林ユウマ: うん。はい。はい。はい。はい。はい。うーん。なんとなくは分かったわ。ま、佐野さんにどうやって繋げようね、これマジで。あ、本当。うん。オッケー。ああ。いや、ほ、いや、いるかな。結構これ俺ら、俺らの中の感じしない？あ、ペリメロンみたいな出てくるけど、この領域はペリメロンですら手つけてないっしょ。

安部和音: いや、でもペリメロンみたいなのがさ、またいっぱい出てくるぜ、絶対。いや、ま、そうなんだけどでもなんかだから、今思ったのは息の構造と前についてなんか何か

01:21:10

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: 3冊ぐらい本を読んだ方がいいんじゃないかっていう共通知を作る。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: 気通知をクリエイティブに落とし込むみたいなのとかブランドに落とし込むとかすごく良くない？という話。

竹林ユウマ: うん。ああ、俺それうーん。いや、アイデアとしてはめっちゃめっちゃ面白い。

安部和音: うん。で、そのなんか竹林君が

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 1番多分詳しいから本は竹林君が選ぶとかさ。あ、本当？うーん。

竹林ユウマ: うん。ああ。ま、演技ならめっちゃめっちゃ分かるよ。カオス理論だね。ま、バタフライエフェクト分かる？うん。

安部和音: うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: あの、カリフォルニアで蝶が羽たいたらその反対の、ま、地球の裏側で竜巻が起こるみたいな。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。

01:22:03

安部和音: うん。うん。分かるよ。

竹林ユウマ: うん。で、それを、ま、どうやらカオス理論と呼ぶらしく。

安部和音: うん。カオスって言んだ。

竹林ユウマ: そう。で、俺カオス理論はそんなわかんないんだけど。

安部和音: 気うん

竹林ユウマ: で、カオス理論は、ま、何かしらのそのバタフライエフェクトみたいな法則、世の演技の法則を、ま、機科学か数学かを用いて体型化したら、ま、何やらの軌動が見えてくるみたいな。

安部和音: 。

竹林ユウマ: で、これはスピリチュアルの話だけど、どうやらそのカオス理論が、ま、ブックもないみたいなのを前知り合いに言われて、その画像、あ、これだ

安部和音: へえ。

竹林ユウマ: 。これ、これ、これ、これカオス理論を図表にしたらこうなるらしくて、これ。

安部和音: 見えなくもない。どれだよ。お前の顔しか映ってねえよ。

竹林ユウマ: うん。ちょっと待って。これしてる。

安部和音: あ、これ知ってるわ。これ知ってるわ。

01:23:07

安部和音: あ、これ、これってそうなんだ。ええ。はい。はい。あ、なんかなんさ、なんかさ、俺がやりたいなと思ってた。あ、ごめん。あの、あれ、またボード開いてくんない?ピンタレスたの。あのさ、た、盾のラインがいっぱいあるさ。

竹林ユウマ: うん。らしい。顔するローはこれ。ここ。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: その、あ、その、それ、それ、これ、こういうこと、こういうことはあのルーバでやりたいなとか思ったんだけどさとか、あのね、

竹林ユウマ: うん。うん。はい。はい。はい。なるほどね。

安部和音: これのパナソニック、あ、それ、それ、それ、パナソニックのさ、右、右にあの俺らで隠れてる今ちょうどソニックデザインさ、これ看板超かっこよくて、この3

竹林ユウマ: こうか。ああ。うん。

安部和音: D プリンターで看板にしてんのよ。

竹林ユウマ: うん。なるほど。

安部和音: 調べてみて。パナソニックデザイン。

01:24:05

安部和音: そう。買取り再販の授業する時にさ、全部この看板つけようぜって言った。

竹林ユウマ: ちょっと待って。

安部和音: 言ったんだよね。どっかにね、あるんだよ。

竹林ユウマ: あ、これ。

安部和音: あ、これだ。で、これにさらにライティングしてて、どっか。

竹林ユウマ: あ、うん。うん。ふんふんふんふんふんふんふんふん。あの、俺らにしか分からない謎の学術的な理論理を形にして意味。うん。うん。

安部和音: あ、それ俺のあれかな？俺のアイデアかもしれないな。ちょっと浮かせて影を作るとみたいなのを面白くないっていう3D こういうの作って。そうだからそのなんかこれこの揺らぎあのこの影みたいな揺らぎと俺はじゃあ呼ぶとしてゆらぎをがむぐらいの感じは好き。

竹林ユウマ: うん。うわあ。

安部和音: なんか角形がこうやって3D プリントで置かれてんだけどなんかめっちゃ綺麗なベジェで影ができてるねみたいなみたいなのが看板とかにあったら超かっこ

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: いいなって思う感覚っていう看板でやりたいことみたいな話これちょっと浮いて照明が当たってたらさすげえ面白いと思わないだっそう、なんかすごい真っすぐの線に見えるのに影がそうやってなってるみたいな。これ、これ、これ、これ、これちょっと浮かしてんだよね。ま、みたいな遊び方とか好きだなみたいな。

01:25:26

竹林ユウマ: むずいな。めっちゃ感覚的な話だよね。いや、分かる、わかる。うん。うん。うん。うん。うん。

高橋英信: お

竹林ユウマ: ま、そっか。この影ができるんだもんね。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。これか。うーん。なるほどね。うん。あ、俺やるならうーん。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: もうちょっと解釈を始めやすい。その解釈がその正解にたどり着くかどうかはもう完全に無視として。

安部和音: いや。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: ま、多分例えばこのさ、図にさ、なんか点は何個か打ってあって、なんかそれぞれの点をなんて言うの、なんか定義づける謎の単語みたいなのがさ、ちょっと散りばめてあったらさ、その解釈をし始めようとするじゃん。

安部和音: うん。

01:26:35

安部和音: うん。うん。あ、なるほどね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: そ、なんか綺麗だなみたいなので終わらない方がいいってこと。

竹林ユウマ: あ、そうそう。これだと模様で終わっちゃう気がしてて、ライトソ見るとね。

安部和音: あ、なるほど。うん。ふん。あ、俺でも逆にね、あのかっこいいからやりましたみたいなことがいっぱいやりたいっていう。

竹林ユウマ: うん。あ、そう。なるほどね。

安部和音: え、ま、意味あつ究本当になんか意味ないなってことばかりだなと思って毎日だから。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。なるほど。ダイズムだね。うん。あ。はい。はい。はい。はい。はい。いやあ。

安部和音: そうそう。そう。あ、そうだ。俺大好きなのよ。ダイズムとかさ。いや、もうなんかいけりゃいいじゃんみたいなさ、話。そう、そう。だから避けりゃいい。避けよけりゃよかったらそれを見た感度高いやつってのは意味を求めようとするんだよ。そだもうそれがいいわけじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

01:27:30

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: 余白みたいなさ。

竹林ユウマ: いや、分かる。いや、言ってることね、全部分かるんだよ。なんかね、全部デジャブなんだよ。うわ、その感覚めっちゃ分かるわって思うんだけど、事例が1個も思い出せねえ。

安部和音: え、でもこれそうじゃん。

竹林ユウマ: ま、そうだ。

安部和音: パナソニックデザイン京都のさ、これ意味ないないでしようなみたいな感じじゃん。

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: お

竹林ユウマ: まあ、うん。うん。うん。

安部和音: 例えばパナソニックが3Dプリント手に入れたからやりましたみたいなさ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: なんかそんなんでもいいんじゃないかかっていうさ、最近超かっこよくない? こいつやばいよね。

竹林ユウマ: うん。うん。フランツ系エド。これすごいよ。

安部和音: こいつ NHK で番組作ってんだもんな。

高橋英信: ええ。

竹林ユウマ: あと何だっけ? ニってる。ちげえわ。あ、でも恐怖進展っていうのやってんのよ。

01:28:30

安部和音: うん。ああ。あれ、あれやばかったな。

竹林ユウマ: あ、あれの PV をランツが作ってるね。

01:31:46

竹林ユウマ: モキュメンタリー、あのフィクションなんだけど、実際にあるドキュメンタリーっぽく作ったあの感覚なんだよな。

安部和音: あ、はいはいはいはいはい。違和感をクリエイティブにするの流行ってる。

竹林ユウマ: あ、そうそうそうそうそうそうそうそう。

安部和音: はいはいはい。ま、いいな。

竹林ユウマ: 違和感。

安部和音: あ、よくね、良くねえな。

竹林ユウマ: 違和感となんかその違和感をもうちょい言語化するとあの地で出てきたんだけどさ、タウマ全員あのソクラテスだっけ？ソクラテスか

高橋英信: た。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: アリストテレスが解いたあの知的探球の根源になるなんか疑問神みたいその感覚なんですよ。

安部和音: うん。ああ。はい。はい。はい。ん。始まりにある教。うーん。ああ、なるほどね。

はいはいはい。ああ。はい。

竹林ユウマ: タウ。うん。

安部和音: あ、あのさ、俺が好きな空間っていうのがこれでさ、ダ部が好きなのってそういう理由かもしれとか、あとそのホテルにある謎の空間みたいな弾やreームコアからなんだ。

01:32:49

竹林ユウマ: うん。うん。ああ、そうだと思う。うん。あ、ど、あれだわ。俺結構明確にこれを感じんのあれだ。ドリームコアだ。ドリームコアだからリミナルスペースとかさ、あの別になんか怖いたあの存在がいるわけではないけどなんか不安になる空間

安部和音: エミナルスペースって何だっけ？ミルはリミナルスペースって言うんだなんかリミナルスペースってクリエイティブあった気がすん。そうそう。

竹林ユウマ: なす。

安部和音: なんとかでさ、あの、多分多分上ここは確認にしないといけなかったんだろうけど、それを知らない時はめちゃめちゃ違和感ある空間とかあったりするじゃん。共有してよ。共有。うん。はい。はい。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。これ、これ、これとかさ、あれ、今してない。本当だ。リミナルスペース。

高橋英信: よし。

竹林ユウマ: この手すり。

安部和音: はい。はい。はい。はい。

竹林ユウマ: あの、こういう、ま、これ一時期流行ったんだけど、こういうリミナルスペース。

01:34:16

竹林ユウマ: 別にこれ何も幽霊とかさ、怪物がいるわけじゃないけど、その人の不安感をとてつもなく煽る何かみたいな。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: 俺これに狂わしいほど引かれてた時期がありまして、この感覚とさっきの恐怖とかさんがやりたいって言ってたこと。

安部和音: うん。うん。うん。うん。ま、やりやりやりたくはないけどホテルでも。

高橋英信: お

竹林ユウマ: いや、そう。そののそれに対して感じる印象が結構近いんだよね。なんだろうな、これ。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: ま、理解できないから理解不能なものにさ、直面した時ってさ、感情が動かされるじゃん。

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: カッコいい映像見た時とかもそうなんだと思うんだけどさ。

安部和音: そうね。

竹林ユウマ: うん。その自分の頭が情報、自分の頭の中の情報処理がそれに追いついてないみたいな。

安部和音: うん。

01:35:13

安部和音: うん。うん。ま、でもなんかなんかよくわかんないけどめっちゃくちゃいい気持ちになったっていうのはこのクリエイティブと佐野さんの文章で行けるんじゃないかなと思ってるんだよ

竹林ユウマ: あ、そう。うん。

安部和音: 。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。いや、めっちゃさ、クリエイティブだしさ、面白いんだけどさ、マジでこれ置いてかれないから大丈夫かな？うん。

安部和音: だからもう変なことは言葉言いますって言って喋った方がいいと思うな。

竹林ユウマ: さにうん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: はい。

安部和音: あ、でもなんかブランド秋き茶とか知ってんのかな？ささん。

竹林ユウマ: はい。はい。いや、知らないと思うし。あれ結構割とニッチなんじゃない？秋きタイプは。

安部和音: そう。あ、でもゆ、ユングだか。ま、そ、ま、そうか。

竹林ユウマ: うん。ま、MBTI みたいなもんって言ったら伝わると思うけど。

安部和音: ま、そうね。

竹林ユウマ: うん。いや、むずいな、これ。もうちょっと具体例出さないと多分マジで。

01:36:06

安部和音: あ、でもいや、だからさ、そのでも言なんか結果やるやるべきことってのが結構簡単になったなと思ってて、あの共通値をクリエイティブに

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: するっていう話だから、その共通知から作ろうよって言ったのが超新しいなと思ってるからな。

竹林ユウマ: うん。共通ま、風さんが言ってる共通値これだよな。

安部和音: いや、息の構造を読むとか読んでデザインの話をするとか3冊ぐらい前とか息とかなんかそういった精神を学んだ後にその共通値

竹林ユウマ: あ、そういうことね。あ、うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: を持った人間同士でこういうなんかクリエイティブを作るっていうコンセプト自体がめっちゃ新しいものになるんじゃないかっていうだから、ま、やることさ、本読むことにな

竹林ユウマ: うん。うん。うん。はい。はい。はい。はい。

安部和音: 、なるかなっていう回だろうね、こいつ。

竹林ユウマ: あ、え、それ大丈夫? あ、まあ、クス中に終わる。

01:37:10

竹林ユウマ: ま、ここまではないと思うけど。うん。ま、でも最低限必要なのはこいつでしょ。ロゴでしょ、まず。

安部和音: うん。うん。うん。ま、ロゴとやっぱなんかこうまあまあそう。ロゴか。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。でもないぜ。ホテル作るのに本読んだやつら。

竹林ユウマ: うん。なんだろうな。

安部和音: うん。ステーキホルダーみんなが本読んでるみたいなの。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: しかも宿泊業と全然直接的に関係ないやつね。

安部和音: そうでも詳しくないのに前とか言ってんの違うなと思っずっと思ってたから。

竹林ユウマ: うん。それは間違いない。うん。

安部和音: うん。なんか良くない? なんか置いてくんだけど。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: めちゃくちゃ置いてった話をしながらみんなのクリエイティ、みんなのためのクリエイティブをしてるっていうのでなんかいい感じになるんじゃないかと思ってるよな。なんか

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

01:38:13

安部和音: Apple iPhone作るみたいな話だもんな。多分スティーブジョブズの世界観をさ、こうビジネスに落とし込むみたいな話じゃん。や、その話って。

竹林ユウマ: うん。そうなんかな。普通に西洋哲学者がビジネス始めますみたいな感覚なんじゃない。

安部和音: だってなんかその普通の人は知らない場所でコミュニケーション取ってるやらが普通の人に提供したプロダクトみたいなイメージ。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。はい。はい。はい。

安部和音: いや、ま、そんなことやなくていいんだけど、ま、でもなんか新しいんじゃないかなって。

竹林ユウマ: うん。まあ、いいと思う。多分、あの、そういう試みは多分ここでやしないと死ぬまでやらないであろうな感じなんすよ。

安部和音: うん。あ、そう、そう、そう。なんか若いからやっちゃった方がいいかなっていう話。

竹林ユウマ: うん。いや、ま、かさんがいいなら全然やろう。

安部和音: もううん。いや、いいね。

竹林ユウマ: それは。

安部和音: いや、いいんだけど、そのなんか違和感をクリエイティブに残すとかじゃないよ。

01:39:11

竹林ユウマ: あ、いや、分かるよ。

安部和音: プロセスがめちゃくちゃ違和感あるっていうのをやってみただけで。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: そうそう。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: それはやろうよ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: で、もう飽きたもん。なんかりファレンスばっかみんな。

竹林ユウマ: ま、一旦、あ、でもこれあれだね。もう物づくりの脳をマジで入れ替えないとごちやるね。うん。うん。ま、じゃあ

安部和音: うん。うん。でもなんかまあまあまあ根源としては息をもっと理解したいとかをもっと理解したいとかそういう話だね。うん。

竹林ユウマ: 1うん。このまずなんかブランドのビジュアルのそのコアの部分はぶらさなっていう前提で行こう。

安部和音: うん。もちろんそう。

竹林ユウマ: うん。ま、ここら辺ね、ヒューマニスト3とかここら辺のはうん。

安部和音: ま、なんか読んだ上で何も変わんなかったら変わんないでいい。いいし。

竹林ユウマ: うん。じゃあ何の本を読むかですよ。

01:40:12

竹林ユウマ: ま、でもそういう一期とかうーん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: うん。じゃあ演技とかその今回の事業とかブランドのコアの哲学に対して、ま、神話性がありそうななんかそういう哲学的概念を1回列挙してみ

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: ますか。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: で、俺1個思ってるのは、ま、まず全額は確かにありそう。

安部和音: うん。画面してる。

竹林ユウマ: あ、してないわ。するわ。

安部和音: ずっと不安になって。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: ふんふん。

竹林ユウマ: ちょっと火でマジで気毒だな。なんか何の話してるかマジでわかんないしょ。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: まあ多分そのうち分かってくるんだ。

安部和音: え、そのコンセプトは分かった?うん。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: そう。

高橋英信: さっきのホテルに関することはなんとなく分かった。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。ま、今やろうとしてることも、あの、分かる?その、今やろうとしてること。うん。オッケー。

竹林ユウマ: うん。うん。そう。

01:41:21

高橋英信: あ、分かる、分かる。

竹林ユウマ: うん。ま、でもこの写真が結構ブランドの哲学を分かりやすく表現してて、ま、この空間に含まれてるのが、ま、全体で引いてみた時に

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: 結構モダな印象あるじゃん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: だけど、その完全なその人口的なモダニズムじゃなくて、例えばこういうちょっと老朽してる木材が使われてたり、あとうーんなんだろうな。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: ま、イソップって西洋のブランドだから、わざわざこういう石畳とかこういう和風な木材の縁側とか置かないじゃん。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: でもそれをあえて置くのはイソップっていうその西洋のま、根本的なそのブランドを持ちつつもその多分これどっかの店舗でイソップはその店舗のデザインをその土着のフードに合わせて作る。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: だから鎌倉だったら鎌倉っぽさがイソップの店だけどカプ鎌倉っぽさがあるみたいな感じでそのイソップが持つブランドのいいところとその土着フードが持ついいところ

安部和音: うん。

竹林ユウマ: を両取りしていくみたいな。

安部和音: うん。

01:42:46

安部和音: うん。

竹林ユウマ: ま、それがうん。

安部和音: あ、やりたい。

竹林ユウマ: はい。

安部和音: 俺がなんかさ、その共通値をさ、違う場所で作りたいって言った理由がさ、それだわ。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: なんか土着をひ、あの、言葉で表現するのに建築側だったりデザイン側の用語では浅いんだよね、多分。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: だから例えばこの木をこの古いさ、この小材を使いましょうっていうのがさ、何なんだろう。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: なんか俺味とか最近言ってるけど味って言葉結構いいなと思ってて。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: で、味っていうベクトルが全員同じだったらめっちゃいいよねっていう話なんだよね。その人によって味が違うじゃん。多分一般人たちが聞いても同じ本を読んだ上での息とか味とか演技とかって言葉遣いで多分多分大体が同じ線を持つようになるんだよね。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

01:43:28

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。そうだね。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: それで鎌倉にホテル作るってなった時に鎌倉っていうのは味が強いよねとかそ話ができたらめっちゃ唯一無理のその着を表現するホテルになるイソップもあるんじゃないかなって。だからこれをなんかさ床のなんかタイルがじゃあリッチとか言うんじゃないかって上品とか言った方が多いんじゃないかとかさ。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。そうだ。うん。うん。うん。うん。

安部和音: ま、その上の手ってる黒い石の方とかね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: これをなんか西洋、西洋建築で言ったらなんかこうリッチとかなんかそういう言葉になっちゃうんだけど上品っていう言葉を例えば息の構造を読んで勉強し

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: た上品とは何かっていう上での上品って言った方がカッコいいよね。

01:44:30

竹林ユウマ: うん。

安部和音: てカッコいいリッチになる。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: 上品になるんじゃないかっていう。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: うん。ということすね。ひで、秀さん。

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: よし。このイソップで言ったらさ、上側のさ、ライトとかはリッチになるわけ。

竹林ユウマ: うん。ああ。

安部和音: あ、いや、だからそのなんかそれをこのさ、床の手ってるさ、石のり、あの上品と上の関節照明の上品って違う品じゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: でも同じって形用できちゃうじゃん。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: でも勉強したらこれは上品ではなくてなんたらだっっていう言語がまた出てくる可能性。

高橋英信: そこのニュアンスを細分化する。

竹林ユウマ: うん。はい。はい。はい。

安部和音: うん。そうそう。

竹林ユウマ: あ、でもそうだね。

安部和音: そうそうでも両方って言えちゃうのがさ、こう言葉の弱いところでま、わかんない。なんかお上品と上品の違いがあるかもしれないし。

01:45:26

高橋英信: うん。うん。まあ、体分化するために、ま、上のライトはリッチで床は上品っていう言葉の方が適当かなっていう。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: なんかその、それも日本語で、日本語っていうか、なんかその本の中に出てくる言葉でやっちゃうとか、ま、気はね、行きたいね。やっぱ行はやばいからな。

高橋英信: あ、うん。

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: うん。あ、分かりました。文脈分かりました。

竹林ユウマ: うん。うん。学行きうん。演技あと俺1個これめっちゃ今回のブランド哲学にぴったりだなっていうのがあって、ま、火でピンと来ると思うけど、あのアウフ、アウフン。

安部和音: うん。なんかこの前あれだ。ひでに教えてもらった。それふんふん。

竹林ユウマ: ああ。

高橋英信: 聞いた。

竹林ユウマ: これだ。俺らがやろうとしてんのはまさにアウ便だと思ってて、モダンの良さもあるじゃん。

高橋英信: うん。うん。

竹林ユウマ: モダンの良さは、ま、直線的で资格的になんて言うの？ 企科学的な宣伝された印象があるじゃん。

01:46:48

竹林ユウマ: 直線で構成されてるから。

安部和音: うん。うん。

高橋英信: うん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: で、それって完全を意味してて、永久を意味してる永続で、それはモダン、モダニズム、モダンデザインのいい部分じゃん。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: でもモダンデザインってなんか完全感あっていいよねって思うけど、でも完全すぎて人間身ない？ っていう問題があると思うんだよ。

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: じゃあ、モダンデザインだけど、人間らしさも取り入れたその完全と不完全の

ハイブリッドがあつたらいいよね。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: お互いの完全、完全的なデザインのいい部分と不完全なデザインのいい部分で、そのいいところだけをミックスさせて、もう1段階上のレベルに

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: 消化させる。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: ま、これはアウフって言うんだけど、これがかなり俺らがやるロトしてることに近いのかなと思ってて。

高橋英信: うん。

安部和音: はい。はい。はい。

01:47:54

安部和音: いいね。それテーマに入れようよ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: あ、それ、それ絶対欲しいわ。

竹林ユウマ: え、これめっちゃ面白いのが、ま、これデザイン思考と結構似てるんだけどさ、アフ、ま、ドイツ語なのよ。

安部和音: うん。うん。うん。そうね。

竹林ユウマ: で、これ1つの単語の中にこれ意味ね。意味。その単語の意味まず1個保存するっていう意味があんのよ。

安部和音: うん。そう。

竹林ユウマ: で、もう1個意味があんだけど破棄するっていう意味があんのよ。

安部和音: はい。

竹林ユウマ: ね、愛反する意味がこの1つの言葉に内放されてて、で、これをまとめて日本語役にさすると洗練させるって俺は解釈して

安部和音: うん。はい。はい。

竹林ユウマ: て、で、洗練させるっていうのはこれがなかったらいいよねっていうものを、ま、不要なものを捨て去るで、いいものは残す。

安部和音: うん。なるほど。うん。

高橋英信: うん。

安部和音: うん。うん。うん。

01:48:58

竹林ユウマ: この行為自体がアウフ平便でそれは洗練させるっていう洗練を意味するから、ま、1つの単語に、ま、保存と覇気という言葉が共存してる。

安部和音: うん。なるほどなるほどね。なんかさ、音ちって言うともっちゃうさ、浅くなるよね、この。

竹林ユウマ: そう。うん。そうね。

高橋英信: ああ。

安部和音: だ、これがさ、共通知だね。

竹林ユウマ: うん。そうだよ。うん。

安部和音: アフヘベンとオコ地震の違いが分かるやつにしか作れないクリエイティブがうん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: うん。うん。で、ま、アウフ平便はヘゲルなんで、ま、だからあの歴史、歴史哲学講義とかじゃない？っていう本があって、いや、俺このこれ岩波

高橋英信: お

竹林ユウマ: 新書から出てんだけど、この前あのさらって読んだけど読むのに1年かかる。うん。まあでもアウベは多分他にもうん。

安部和音: はなんかアフ平の概念をないかね、体型的に学ぶみたいな。バランス感覚をつけるためにかさ、じゃ話変わるけどさ、ビラ白崎あの売りに出したね。

01:50:03

竹林ユウマ: いや、あるっしょ。絶対あるよ。うん。うん。

安部和音: あ、これはクソ気に入ったなっていう俺の感覚やっぱあって、それはアルフ平便がないんだよねから。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: それはめっちゃう今テーマかもしれない俺たちに。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。

高橋英信: はい。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 特にやっぱりデザインに生かす。それをとっていう本が読めたら強いかも。

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: はい。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: こっちと哲学は大テーマにして、今読みたいのはデザイン系の手法とか写真とか手法かな？うん。デザイン本みたいなわかんないけど。ああ。うん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

高橋英信: はちょっと具体的なお

竹林ユウマ: これで言うとデザイン思考になるんじゃない？デザインが俺割とアウフだと思ってるから。ハウヘーベンのなんか現代語誤訳の1つ夜までもアウベンいや弁償法で元々

安部和音: え、でももっとアウフに着目してない。

01:51:11

安部和音: うん。着目してて欲しいみたいな。本当アウ弁を学べばいいのか? 歴史哲学講義やん。じゃあはあ。

竹林ユウマ: そのヘーゲルがその哲学でこのアウベンっていう言葉を使い始めたんだけどその文脈で1番そのキモいになってくるのかなんか弁償法っていうやつらしくて

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: で行ったら弁償法っていうのはあ、これひでなんて言えばいいんだろうね。

高橋英信: やべえ。忘れてる。

竹林ユウマ: うん。ま、例えばかさんがいるとしてで、俺らから見るかさんはうーん。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: まあ、なんか色々やっててで、仕事が好きでっていうのがかさん俺らから見た。

安部和音: うん。ああ、そういうことね。さくもうんはいはいよかった。聞いてなかった。あ、

高橋英信: ああ、か訂勢アンチ人

竹林ユウマ: でも奥さんから見たら例えおい。

安部和音: 3行で。あ、いや、違う違う違う違う。そのなんか俺がどうたらみたいな言ってたの。うん。うん。

竹林ユウマ: あ、それぞれ。

01:52:22

竹林ユウマ: あ、そう。だから俺ら、俺と秀から見たかさんは、ま、じゃあ仕事の人だとして、死護で、ま、仕事好き。あとなん、かさんの特徴なんだろうね。

安部和音: 仕事食べる。

竹林ユウマ: 仕事が俺らから見たかさんだとする。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: じゃ、奥さんから見たかさん。かさんが例えば奥さんにめっちゃ甘だとして、でも奥さんから見たらかさんはこれじゃなくて甘えんぼ食し棒でもこれどっちもかさんで

安部和音: ああ。はい。はい。はい。はい。はい。はい。う。そうね。うん。

竹林ユウマ: 俺らから見たらこっちはかさんじゃないしえ、奥さんから見たらこっちはかさんじゃないけど事実としてどっちもかさんとして存在してる

安部和音: うん。うん。ふん。うん。ふん。ふん。

竹林ユウマ: でじゃあかさんって何なのなのかみたいなのを一まとめ1概念にまとめようとした時にあーうわむずまどっちもかさんだよねみたいな

安部和音: うん。

01:53:20

安部和音: うん。ふん。ふん。

竹林ユウマ: のが弁償法なんだけどそうまそうだね今の文脈だとま全てなんだけどうんま弁償法マジで簡単に言うとまぜがあるとし音質

高橋英信: 今アフ平面する。うん。うん。押して消化する。

安部和音: うん。それでもさ、全て全てをあれじゃないの?統合したものが俺にない。うん。違うん。違うんだ。何? あ、例えば分かった。分かった。それさ、あれじゃない? 本質って言葉じゃないの? それって違うの? それってさ、そのじゃああんぼと仕事食べてるっていうその2つを、ま、共通って

竹林ユウマ: 。ああ、でもそうかも。うん。うん。うん。

安部和音: 何っていうところを本質と呼ぶっていう話じゃなくて、それをそれを完璧に言語ができた時にそれは俺を言語化したことになるみたいな

竹林ユウマ: うん。ああ、近いと思います。

安部和音: 、そういう話。

竹林ユウマ: あ、そうそうそうそうそうそうそうそうそう。

安部和音: ああ、なるほどね。じゃ、本質みたいなね。

竹林ユウマ: うん。

01:54:19

竹林ユウマ: まあでもそべ法あ、これはちょっとね、俺も全然深くは触れてないからあれだけど、ま、ちょっとみんなで勉強しましょう。

安部和音: あ、そうね。炎法。ふーん。なるほど。うん。ふん。うん。はい。

竹林ユウマ: いや、でも弁償法というかアウベは割と多分ビジネス、どのビジネスにおいても重要なんか思考だと思うから勉強してそうな。うん。うん。ま、

安部和音: うん。でもさ、デザインでアウフ平ができてる人達ってやっぱさ、一向けた会界隈の人たちだよ。ああ。

竹林ユウマ: Apple はあれ分かりやすか平便だよ。iPod は音楽聞けるし。軽いしちっちゃいし持ち運びいいけど音楽しか聞けないやん。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: ま、これで言うと iPod の手ぜはちつつちっやいの何局も持ち運べるでアンチぜはいや音楽しか聞けないやん。

安部和音: うん。ふん。うん。ふん。ふん。うん。うん。

竹林ユウマ: で、これらをアウフ弁して生まれた人づがじゃあオン iPod に携帯機能をつけて何でもできるようなものを作ろう。

高橋英信: お

安部和音: うん。ふん。ああ。

竹林ユウマ: ま、これが人税。

安部和音: ああ。そういうことね。

01:55:34

竹林ユウマ: うん。だからプロダクトデザイナーは割とアフ平便は結構触れてる気はしてる。

安部和音: ま、でもあれじゃないの？ それもう批判的思考法みたいな話だ。

竹林ユウマ: あ、でもそうだと思う。

高橋英信: うん。的な感じがするね。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: はあ。はあ。ああ。でもね、アンチ違うんだよね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: なんか弁償法のね、弁償法のすとね、アベのすのね、なんかレベルが違うと思ってて、俺がやばいと思うのがアフヘイベンの方なんだよな。思いつかないやんみたいな。な

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。です。

安部和音: んて言うんだろうな。やっぱね、リノベやってるとね、アフやってる人たちのね、すごさが半端じゃないっていうかさ、ま、特にイソップみたいな作れちゃうとか

竹林ユウマ: はい。はい。はい。はい。うん。うん。確かに。

高橋英信: うん。

安部和音: 、あの、土の天井とかさ、アメライフ平便でさ、マジかっこよかったもん。

01:56:31

安部和音: で、マジかっこいい以外の言葉がないんだもん。あれ汚いをさ、通り込めるわけじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: これってすごいことだよなって思ってるし、なんかビザハニとかがやってるのレベルのものってアフ平の上にあるなという憧れからやっぱりこっちを学びたいなと。うん。これをイソップのこの内装を作れるになりたいね、やっぱり。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

高橋英信: おお

竹林ユウマ: うん。そうだね。いいじゃない。うん。うん。まあ、もう必要なものはこれだと思うけど。これじゃない。

安部和音: うん。本当にそうだと思う。

竹林ユウマ: ま、全額と行きは結構近い気がするから。

安部和音: うん。全額と行きアフ平便はもうめっちゃくちゃ多分デザインにあっていて、演技っていうのはえっとそのホテルができた後のやり方、運営そういう方向でものすごい参考に

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

01:57:28

竹林ユウマ: うん。そうだね。うん。

安部和音: なるんじゃないかな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: だとするとこれがブランド哲学になって、これがブランド valu になって、これなんだ？ ミッションなんかな？

安部和音: うん。ふん。ふん。ふん。あ、でもなんかアフレもブランダイツ学の中に入るんだけど。

竹林ユウマ: いや、ビジョンか。うん。ま、どっちかに寄らせるとそしたらこれらそれぞれをま、なんかこれら今このグループ分けにああ、ちょっと待って。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: ま、分かりやすくカテゴライズしようとしたらこうなるんじゃないかっていう。このアウフ平便はブランド valリューに当たってそうで演技はビジョンでこの前とか行っているのは哲学の根本的な部分振る舞いね。

安部和音: うん。ああ、そういうことね。はい。はい。はい。うん。うん。うん。うん。あ、えっと、演技は振る舞い。うん。そして振る舞から生まれるブランドの哲学もあると。

竹林ユウマ: うん。

01:59:00

竹林ユウマ: まあ、それは全然、ま、多分あ、こういうことにはなるだろうな。

高橋英信: うん。

安部和音: うん。そうね。

竹林ユウマ: あ、もうくっちゃくちゃ。うん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: いいんじゃない？なんかめっちゃしっかりしてるブランドじゃん。うん。うん。うん。もうこれブランドスプリントレベしよ。うん。いや、めちゃめちゃ思想強そうなブランドできそうだもんね。うん。

安部和音: ね、これさ、思、あの、めちゃくちゃ思ったもんな。あの、なんだ、ブランド資料にさ、あるよね。ブランドスプリントだよ、これ。

高橋英信: ない。

安部和音: これめっちゃブランドスプリントなの。うん。クリエイティブにちゃんとし込めそうなところがいいな、これ。

竹林ユウマ: ほんなら、ま、ちょっと時間も遅くなってきたんで、ちょ、ネクストアクションを決

め、整理していくか。

安部和音: はい。

竹林ユウマ: どうしようね。

安部和音: ま、まずちょっと本読もうかな。言葉を探そうかなと思ってます。

竹林ユウマ: うん。うん。そうだね。

安部和音: いや、これでさ、これを包括する言葉がアむってかっこいいなって思ったわ。

02:00:20

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 今簡単な言葉なのが。

竹林ユウマ: ああ、なるほどね。

高橋英信: おお。

竹林ユウマ: こういうことかっこいいな。

安部和音: うん。いや、もっと同詞だね。同詞に。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 同詞として。うん。もうほら、めちゃくちゃかっこいいやん。めちゃくちゃかっこいいんじゃないですか。

竹林ユウマ: 確かにこれいいな。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: これそのまま落とし込めそうだな。

安部和音: すごいのができたな。なんか本当だな。

竹林ユウマ: やば、フランス系エ藤やん、これ。フランス系エ藤の背景デザインのなんかポスターとかにありそうだな、これ。ああ。え、なんかめっちゃしっかりしてきたな、ブランドが。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: あ、これもうさ野さん入る余地あんのか？うん。

安部和音: で、ま、それをなんかこうなんだろうな。あの人は熱い言葉担当みたいなのとこあるな。

竹林ユウマ: うん。これえっとじゃあまずま、ドック、え、どこにこれ1回消すわ。ネクストアクション25年。

02:01:43

竹林ユウマ: 今日は8月26日。

安部和音: うん。といや、手は動かしたい。そして振り替える左の方のデザインかっこいいけどね。そして今フィグマの左の方見たらめっちゃかっこよかったよ。めっちゃかっこいい。めっちゃかっこいいんじゃない？やっぱデジタルから好きやけどな。

竹林ユウマ: まず、ま、どっちにしるロゴは進める？本読んでから進めるにすんのか。オッ

ケー。ま、じゃあん。うん。ま、カッコいい。カッコいい。いや、普通に別に普通にカッコいいよ。うん。うん。

安部和音: ま、いいや。はい。ネクストなんズヒントがうん。

竹林ユウマ: オナズヒント。ま、ロゴ制作はするとして、えっと、どうしよっかな。もう形にし始めちゃっていいのかな、この段階で。

安部和音: いや、いいと思う。でも壊すこ壊す可能性があることはえっとだから本を読んで違くなってるって拍紙にする。

竹林ユウマ: うん。うん。流し。うん。うん。

安部和音: 気合い気合っかそのつもりで作ろう。

02:02:50

竹林ユウマ: うん。かこ私がでしょ。かこ俺がでしょ。

安部和音: うん。あの、そうですね。被害者、被害者竹林しやけど。うん。うん。

竹林ユウマ: はい。まあいいんだけど。あー、ロゴね。どうしよっかな。ま、一旦えっとこいつベースでやるとしてうん。ま、どんだけ思想が洗練されようが割とここはうん。

安部和音: うん。あ、でもごめん。あの、その大文字文字はやっぱ全部つくパターンあった方があ、小文字パターン、大文字パターン、白文字、大文字パターンは

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: ん、全部つくパターン。うん。あ、全部作りたいってこと。ああ、それは結構時間かかりますね。

安部和音: だからそれで言ったら、あ、だからうん。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: それで言ったらま、そうか。でもこのフォント使うんだもんな。フォ決まったもんな。ほとんどだ。フォ選んだら次だから。でも別に今の段階であれだよ。

竹林ユウマ: うん。

02:03:58

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: ちなみにコースに突っ込むとかっていう話はまだ先の話にした方がいい。

竹林ユウマ: ああ、それまだ先じゃない？ どうわかんない。

安部和音: 5分後に5分後に置いてみればするよ。

高橋英信: ま、言うならそう。うん。ま、候補があつたらいく使えるパターン。

安部和音: そんなレベルの話ではある。

高橋英信: うん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: パースもさ、これぐらいかこくしなんかここにここにさ、乗るぐらいのさ、レベルに
しなきゃだめだよ、やっぱ。

高橋英信: ね。はい。

竹林ユウマ: うーん。ちょっとロゴの工程どうしよっかな。え、じゃあ一旦1番可能性ありそう
なやつを教えて欲しいわ。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: それベースで作るわ、多分。

安部和音: でもめちゃくちゃ小文字で考えたんだけど、考えてたんだけど、あの頭文字大文
字もかがかっこよくて今揺れてるところなんで。

竹林ユウマ: うん。俺はこっちの方がいいと思うな。うん。やっぱAの造形がかっこよすぎる
んで。ま、これはエコだけどかっこいいからこっちがいいっていう感じやね。

安部和音: うん。ま、そしたらじゃあ全部お文字は一旦なしにして2パターンでどうすか？小
文字とえ、Aだけ変えるっていう話になるじゃん。

02:05:12

竹林ユウマ: うん。うん。パターン。ああ、いいよ。

安部和音: それをじゃあお願いしてもいいですか？ま、でもね、まあでもなんかそのテンショ
ンが乗ってるやり、乗るやり方を常にやった方がいいと思うから一応

竹林ユウマ: うん。ま、ちょっとこれ確躍はできないかも。同じタイミングでじゃ、すぐどっち
持ってきますみたいな。うん。うん。

高橋英信: はい。

竹林ユウマ: オケ。じゃあ一旦こいつから着手するわ。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: で、ま、言うても造形に、造形はこれベースでいいかなと思ってて、ただ独自
性を加えたいから例えばここら辺いじったりとかここら

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 辺いじったりとかなんか一旦遊んでみるわ。

安部和音: うん。うん。うん。なんかそれこそあのこれとかハムランとかもそうだけど洗りじゃ
ん。

竹林ユウマ: うん。宣伝より。

安部和音: ベタ打ちのフォントをもっと上品にした感じこれってじゃん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 例えば、ま、キャラクターを寄せていったっていう、ま、そっちになるよね、多分今
回。

02:06:23

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

高橋英信: はい。

竹林ユウマ: うん。うん。いや、そうだね。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: いじり方はそうじゃない。

安部和音: キャラ付け系の方だよね。

竹林ユウマ: うん。だからのノイズを加えるとかではない。

安部和音: うん。そうそうそうそう。そっちじゃないのがいいよなと思ったから。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: シグマのロゴやばいな。

竹林ユウマ: シグマやばいっしょ。

安部和音: 何それ?何それ?何これ?かっこいい。何これ?ても完璧だな。うん。だろうね、これは。

竹林ユウマ: クソかっこいいよな、これ。こいつの A 見たことないわ。うん。ね。いや、これは多分なんだろうね。これ何のフォントをベースにしてんだろう? そもそもベースのフォントがあるのかすらわかんない。ストックホルムのデザインスタジオが作ってんね。日本じゃないな。

02:07:14

竹林ユウマ: うん。

安部和音: これはかっこいいな。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: ふ。でもね、それぐらい納得感はある。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: このアムも。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: え、こ、あ、ベタ打ちでいいからこもなんかあのなんか軽い LP みたいなやつぱりちょ欲しいかもな。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: その今竹橋林橋君が今作ったみたいなやつをこうロゴ大文字小文字バージョンみたいなんでこうやって作ってうん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。じゃ、そっち先やる。で、その LP でその全体のデザイン含めて大文字とこ文字どっちがいいのかみたいな。

安部和音: そっすね。

竹林ユウマ: うん。で、適当にピンタレストで見つけてきた、ま、こういうシンボルを仮置きしてなくてもいいの? オッケー。

安部和音: うん。うん。うん。なくてもいい。どっちでもいい。

竹林ユウマ: ま、じゃあぴったりはまるものがありそうだったらね、入れるわ。

安部和音: ま、それもないバージョン、あるバージョンとかあのコピーペして全体トンだ。

02:08:21

竹林ユウマ: うん。オッケー。え、じゃ、全体トーンの方向すね。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: うーん。こいつ。

安部和音: めっちゃかっこいいけどね。めちゃくちゃかっこいいけどな。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: もうなんか、まあ、その四角の図がちょっと詳しすぎるからあれだけど。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。なんか意味がありすぎる感じはするからあれだけど。

竹林ユウマ: ああ、ちょっと待って。てかビルド、ビルドあるやん。

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: ビルドのウェブサイト結構近いんじゃない？ あれはちょっと愚傷的すぎるけど。そのモチーフがちょっと見せるわ。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 画面共有で。

高橋英信: ちょ

安部和音: そんなだったっけ？ ビルあ、ビルドってでもそう。あ、ビルドってそうじゃん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: なんかすごい線使ってるやん。そういえばそれ。

竹林ユウマ: こうか。あ、ちょっと待って。ミルド営業して。

安部和音: え、本当に？ でもなんかそのビジネスモデル行けるんかなって思ってたけどずっと。

02:09:36

安部和音: ああ。

竹林ユウマ: あ、これちょっとあれだね。

安部和音: 編みすぎ。

竹林ユウマ: 愚傷的すぎるけど。

安部和音: 編みすぎだけど。わあ、今でもスクロールのアニメーションすげえいいな。

竹林ユウマ: うん。表現したいことのベクトルはこういう系ってことでしょ。これもう何かは分からないじゃん。

安部和音: あ、いやで、ま、ま、何かわからないんだけど。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: いや、大人すぎない？大人すぎる。

竹林ユウマ: 大人。

安部和音: 俺の中ではま、それはこのあ、なんて言うんだろう。

竹林ユウマ: ほう。大人すぎるか。大人すぎる。それもうちよいうん。

安部和音: ああ、編んでる。編んでるのがね、こう細かくてなんつうんだ、デジタル感ではないじゃん、これって。

竹林ユウマ: うん。

高橋英信: うん。うん。

竹林ユウマ: うん。ま、射的すぎるってこと。

安部和音: まあ、そう、そう、そうな。

竹林ユウマ: うん。うん。はい。はい。はい。はい。

02:10:52

竹林ユウマ: なるほど。

安部和音: 車実的で大人すぎるみたいな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: でもビルドのに和分とオーブってかロゴはめっちゃめっちゃいいよね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: そういう話だよな。

竹林ユウマ: うん。これもヒューマニスト賛成。これこそオプティマのちょっといじりましたみたいな感じな印象あるな。

安部和音: うん。いや、それもだってあれじゃん。俺たちが衝撃受けたのがこのこのウェブサイトもうビルドのフォントロゴのフォントがやばすぎるみたいな。

竹林ユウマ: ああ、そっか。うん。うん。いや、でもだいたいそれにまさる本当は見つけられてるよ。

安部和音: うん。てなったらしっかりウェブサイト作りたいな。こんなのいないの？うん。

竹林ユウマ: うん。まあ、スタジオでなら作れるけど。

安部和音: あ、そうだな。で、ま、まあスタジオで竹林君が許す感じで竹林君が作るんだったらいいよ。

竹林ユウマ: うん。うん。まあ、一旦は全体トーンでオッケー。

02:11:54

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: じゃあそれをどうしょっかな。ま、じゃ、次の停例くらいまでに作ってこうかな。

安部和音: すね。お願いします。

竹林ユウマ: うん。トーントーンアムアム検闘ちょっと待ってま、ちょっと一旦自由に作るわ。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: ま、アムアムと、あの、あれだね、シンボルゴがあるなし。ま、なくてもいいよ。その無理して、あ、もういらんわってなったらいいらんでいいし。ま、俺らうん。俺らはそっちを、俺らってその、ま、みんなそ、これはあれだね、詰めた方がいいね、多分。

竹林ユウマ: うん。あ、そうだ。シンボルね。うん。うん。さて、哲学の部分はうん。うん。うん。どれから行く？でも振る舞は何？うん。

安部和音: ああ、まあ、今それぞれうん。それぞれ興味があるものでいいとは思うけどあ、でもまああれだよ

竹林ユウマ: ああ、俺なんだろうな。

高橋英信: 全やり Ja

竹林ユウマ: お、いいんじゃない？まあ、別に被ぶってもいいと思う。

02:13:38

安部和音: み共通地を作るって話だから全員多分同じの読んだ方がいいし全く同じの行こうよ。

高橋英信: ま、み

竹林ユウマ: それ同じ全く同じ本読む。あ、オ。あ、じゃあうん。

安部和音: それを選ぶのが竹林君みたいな。

竹林ユウマ: あ、オッケー。じゃあみんな一旦候補を出し合おう。

安部和音: お前仕事多いな。

竹林ユウマ: 今日今日明日ぐらいで息の構造ね。

安部和音: で、まはうん。とりの構造しかねえよ、俺。でもこの話うん。

竹林ユウマ: いや、息の構造はま、でも確かにいや、いいんだよな。でもさ、あれじゃん、もうやっぱだいたい難しいし、息の構造をさ、完璧に理解してさ、それをじゃあ、ま、新しい体系化で起こしたとし

安部和音: 俺と竹林君が挫折したやつ火で読めないと思う。

竹林ユウマ: てもさ、それあの元気今村さんになんかね、言われそうじゃない？あの人が見たらいや、あの人のもうね、なんかコアにある

安部和音: うん。あ、え、あ、そうなの？雪の構造ってあれなの？今村さんなの？あ、そうなん。

竹林ユウマ: 本でしょ、マジで。

安部和音: 俺渋谷系の別のカメラマンさんに教えてもらったんだね、この人。うん。東洋哲学の。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うーん。ま、でもいつかは読みたい本だよな。

竹林ユウマ: そうだね。

安部和音: 毒破したい本。

竹林ユウマ: あとなんかな、俺が知ってる本。平ゲル。うーん。あれ？ま、ちょっと調べてみ

るわ。

安部和音: ま、とりあえずでもなんかディグった方がいいよね。今からね。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: そんな感じでいいんじゃない? 本の話はなんかグループラインでテキストでしていいし

竹林ユウマ: うん。じゃあうん。うん。そうしよう。うん。まあでもこれはだいぶ進んだんじゃない? 今日。うん。うん。はい。

安部和音: で濃密なミーティングでした。

高橋英信: はい。

02:16:16 より後に文字起こしが終了しました

この編集可能な文字起こしはコンピュータが生成したものであり、誤りが含まれている可能性があります。作成後にテキストを変更することもできます。